

十月十三日を以て在京の諸大名並ニ其重立たる群臣を二條城ニ召集め、諮問し玉ひたる上意の略に曰く、我祖宗寵眷を蒙り、二百餘年子孫相承、其職を奉するや、當今外國の交際日ニ盛ニして、愈政權一途に出されば、綱紀難立候間、從來の舊習を改め、政權を朝廷ニ歸し、廣く天下の公議を盡し、聖斷を仰き同心協力、共ニ天國を保護せば、必海外萬國と可並立、我國家に盡す所は不過之候、猶見込の儀も有之候は、聊不忌憚可申聞候とありし、到坐の諸侯群臣みも意外之台慮に驚き、互ニ顔を見合せて對答する者も無かりしに、土州の後藤象次郎と薩州の小松帶刀は、大ニ將軍の英斷を賛成し、速に大政返上の奏議ニ及はるへしと答へたりけれ、將軍の意は益々決して、乃ち其翌十四日を以て、直ニ其奏議ニ及ひ玉へり、扱また朝廷に於ても、よもや大政返上の奏議は、將軍家より出さるへしと思ひ給ひざりし所に、十四日を以て突然その上奏ありけれ、是も意外の思にて、關白其他の公卿、先づ此奏議の勅許ニ及はれ難き旨を以て、退けらるへき歎と僉議ありし、大久保市藏其他の輩、此奏議の出たるこそ幸なれ、直ニ勅許あるへしと論したれ、廷議の其事ニ決して是を允許して、宜く祖宗以來御委任厚く御依頼被爲在候へ共、方今宇内の形勢を考察し、建白の旨趣尤ニ被思召聞食候間、天下と共ニ同心盡力致し、皇國を維持し、宸襟を可奉安御沙汰之事云々。

明治元年戊辰正月、徳川慶喜追討六師應援ノ官符天童ニ達ス。

〔御令達〕

織田兵部大輔。

就徳川慶喜叛逆爲追討、近日官軍自東海東山北陸三道、可令進發之旨被仰出候付而、奥羽之諸藩宜知尊王之義、相共謀援六師征討之勢旨、御沙汰候事。

正月、

同年二月二日、米澤藩主上杉齊憲、仙臺藩主伊達慶邦等、協力以テ會津藩ノ罪ヲ寬ニシ、奥羽二州ノ兵ヲ停メ、ンコトヲ謀ル。

〔奥羽同盟始末〕

二月二日、容保ノ男松平喜徳使ヲ米澤ニ遣ハシ、雪冤ニ盡力セラレ、ンコトヲ哀訴ス、初メ容保忠篤等ノ國ニ就カントスルヤ、相約シテ曰ク、恭順謹慎將軍家ノ冤ヲ哀訴シ、生死存亡ヲ共ニセント、容保因テ援ヲ米澤ニ請ハントシ、忠篤ヲシテ援ヲ仙臺ニ請ハシム、忠篤乃チ石井與惣土屋新三郎ヲ京師ニ派シテ具狀セシメ、自ラ道ヲ迂シ親シク仙臺ニ抵リ、慶邦ニ面請ス、慶邦許諾シ、特ニ在京師ナル家老大枝孫三郎ヲシテ陳情セシムベキヲ答フ、忠篤ハ喜ヒ歸國シ、謹慎以テ其命ヲ俟ツ、上杉齊憲亦喜徳ノ請ヲ容ル、ヤ、參政木滑政愿ニ手書ヲ授ケ、慶邦ノ意ヲ諮詢セシム、會々慶邦亦側目付安田竹之輔、儒者玉虫左太夫ヲ遣ハシ、時事ヲ建白セルコトヲ報シ、且ツ同心協力以テ會津ノ罪ヲ寬ニシ、以テ奥羽二州ノ兵亂ヲ停メ、ンコトヲ謀ル、是ニ於テ仙臺二藩ノ議期セスシテ吻合ス、二藩大ニ喜ブ。

同年三月八日、徳川慶喜酒井忠篤ニ命シ、御料地村山郡七万四千石餘ヲ管領セシム。

〔採訪史料〕

御名。

出羽國村山郡高七萬四千石余、其方御預所ニ被仰付候間、取締向等念入可被申付候、尤口米永は所務不被仰付、御代官並之通諸入用被下之、委細之儀は御勘定奉行可被談候。
右二月七日、於江戸表御沙汰有之、翌八日春山半内様早追ニ而、右御用御持下リ、同十三日明方御着、御觸達有之、十五日恐悦有之、御老中稻葉美濃守様御沙汰。

高橋省助。

今度御預所ニ相成候、最上村山郡江罷越場所見分之上、脚向取調候様被仰付候。(二月十六日御沙汰)
同年四月朔日、鎮撫總督ノ仙臺ニ到ルヤ、織田信學吉田大八ニ命シ、仙臺ニ赴キ伺候セシム、總督大八ニ命シ、舊幕府領村山郡柴橋寒河江兩所管地ヲ公收セシム、是ヨリ前、徳川慶喜同領收納ヲ舉テ、酒井忠篤ニ給與ス、忠篤乃チ吏ヲ派シ之ヲ所轄セントス、代官山田左金次、手附村井友次、高野俊八等未タ交付ヲ了セス、是ニ至リ大八命ヲ傳ヘ、俊八ヲシテ柴橋寒河江兩局、並ニ諸倉庫ヲ交付セシム、時ニ薩長藝筑仙臺諸藩兵皆天童ニ集ル、仍テ窃ニ忠篤ノ吏ノ兩局ニ在勤セルモノヲ襲撃センコトヲ計ル、諸吏之ヲ聞テ皆遁去ス、諸藩兵遂ニ兩局ヲ没入シ、府庫ヲ藉シ榜制ヲ撤回シ、伊達氏ノ兵ヲシテ兩局ヲ守備セシム。

〔公私書留書〕

松浦英次氏所藏

四月朔日九ツ時頃吉田大八様早打ニ而御著相成、直ニ本陣竹屋ニ御腰休、御殿様へ御伺之上、柴橋御手附衆へ御差紙、其文ニ曰ク。

〔前文略〕申渡義在之候間、即刻可罷出候以上。

依之御手附衆之内、高野俊八と申もの壹人、何等事も不知久之本青柳氏へ參、御咄之儀ハ何事ニ候哉、天童廳ニ而可罷出との紙面坏と申、青柳案内ニ而宿を取、其竹屋ニ參り候處、吉田様上段眞上面ニ而申渡儀左ニ。

但し重野様(謙次)始左右之もの平伏ニ而高野殿三之間。

其方共是迄支配之兩陣屋可受取與の勅命、若於違背者則坐ニふみ取る事。

翌二日(中略)夕刻寒柴兩所々、村井友次高野俊八申來リ、日野屋ニ上リ(中略)色々以書付申上候、御陣屋之事御渡し申就跡者御構不申との文言在候間、是又被咎餘程難義のよし、次ニ如何之譯ニテ庄内ニ引渡被成候、且又御收納山形へ爲運候次第、何方々差圖之理色々被仰聞、漸々之事ニテ御佗相叶ひ歸行之旨、其段大八様々官軍の御銘々へ御談在之、然る處諸藩々大キニ疑惑仕之由、可呼戻杯と大ニ立腹、取押へ其内庄内勢を皆殺しに致積り之由、二日八ツ時廻狀高札之處、早速取外し可申と、まゝし漆山村北目村々々其取外し候由、其夜官軍寛々休足と見せ懸、凡九ツ時分騒ぎ出し、先手者明松後陣之輩ハがんどんニ而、矢野目を通り一間屋を打起し、案内させ船場ニ到リ候處、船在之候へ共大八様々御斷有之、依而出船不致、依之官軍の若もの拔身ニ而船へ飛入、是ニ候と被申無據十四五人ッ、渡船仕候よし、其義勢ヲ見るに、全く庄内勢をさんくニ切而己を、專要と致様ニ相見申候、其船早速越ス時者、大キに痛ミ出來在之哉と申、尤其節官軍寒河江へ押寄候時刻者、庄内勢遁去同時のよし、其ぬけかけを聞き知吉田様大キに驚き跡々早馬ニ而追付、船場々同道直と寒河江へ押寄、乱妨ハたし候へとも、庄内勢一人も無之遁去。

一天童勢も柴橋へ馳付、乱妨いたし候へども、是又一人も無之只もの郷藏へ、左近將監府と戸
べめのよし、寒河江も同断諸藩受取候郷藏杯へ者、銘々の符印有之よし。
一寒柴陣屋仙臺御預り、右者官軍始メ奥藩を、天童へ必至と御頼候處、庄内への矢恐ろしく御
辭退申上、無據仙臺預相成候よし。

同年同月三日、總督府、山形城主水野忠弘ニ、庄内征討應援出兵ヲ命ス。

〔水野家乗〕

本月三日、忠弘公へ今般羽州庄内征討ニ付、應援出兵ノ手當可有之期限ノ儀ハ追而可相達
旨御達書、總督府ヨリ御渡ニ付、應援ノ兵隊總司元宣(水野三郎右工門)引卒シ、御達次第出張ノ事ニ決
ス。

同年同月六日、鎮撫總督九條道孝令シテ、舊幕領ノ人民ヲ安堵セシメ、各村揭示ノ制札ヲ
撤回シ、伊達氏ノ兵ヲシテ柴橋寒河江兩局ヲ守備セシム。

〔採訪史料〕

其村々此度 天朝御領ニ相成、仙臺家江御預ケ相成候條、得其意小前末々迄不洩様可申達
候、右ニ付而も追而高札書替可相渡候、江戸差向候義ニ付別紙寫差遣間、村毎壹枚ツ、請取
前々高札取除右張置可申候、此廻狀並高札寫一同早々順達從留可相返もの也。
辰四月六日、長岡飯御役所、大石田三組外拾ヶ村、

今般 王政復古之折柄、徳川軍勢於伏見表反逆、依之征討將軍被差向候ニ付而も、徳川領地

同家臣井同謀之領地被召上候ニ付、御政事向等早々從 朝廷被仰出候得共、夫迄之處ハ年
貢其外舊典ニ依るし、尤難關事件と速ニ可申出困窮之者江於下精々致救助人民安堵せし
先、謹而朝廷之御沙汰可相待もの也。

慶應四年辰四月、

奥羽鎮撫總督府。

同年同月十六日、副總督澤宣嘉、村山郡新山驛ニ次ス、驛ハ山形城主水野忠弘ノ所領ナリ、
家老水野元宣同驛ニ出迎ス。

〔水野家乗〕

同十六日、副總督澤三位様、御領分新山村御泊、參謀薩州藩大山格之助及ヒ薩長兩藩ノ兵隊凡二百人隨行ス依御機嫌伺トシ
テ、御旅宿へ罷出御逢アリ。

同年同月十七日、澤宣嘉、長州薩州筑州諸藩兵ヲ率テ上山ニ入ル、吉田大八先導タリ、明日
宣嘉諸藩兵見目原ニ閱ス。

〔上山見聞隨筆〕

一同四月十八日、見目原に於て薩州長州筑州勢、及山形天童當藩共一同調練あり、澤三位中納
言殿は御馬にて御出ニ成る、御先乗りは吉田大八立烏帽子にて出る、當殿様にも御馬にて
御出あり、御裝束は紫羅紗三齊羽織を着し陣笠を召し、澤三位殿ハ羽織袴御着用、裏金の陣
笠深形なるを召し、見目原小高き所ニ御陣營を構ひ、紫葵御紋の幕を張り、澤三位殿吉田大
八當殿様共御着座あり、見物の貴賤老若大に群集す、上方勢残らす斷髮也、支度はチヨキ、マ
ンテル、ダンブクロの裝束なり。

同年同月十九日、澤宣嘉天童ニ入ル、水野忠弘ニ討庄應援ヲ命シ、二十四日ヲ期シ新庄ニ出兵セシム、此ノ日諸社寺ノ僧徒來謁ス

〔諸説聞書〕

松浦氏所藏

十九日凡八ツ半頃、澤三位殿首尾好く被爲入候、御行列

一番重野謙次郎殿、馬乗指物鎗

二番吉田大八殿、馬乗絹旗鎗

但大八殿十五日御出迎ひ出張、重野殿十九日未明ニ山形迄御出迎、人數三十人程、鳴物銅羅

太鼓銘々鐵砲二行

三番長州様御人數、大將二人馬乗

但し大簇貳流、鳴物太鼓貳ッ、隊長五六人異体の御仕度二行

四番澤三位殿、御馬ニ被遊候

但し御左右貳拾人餘、御紋付之大簇二流、鳴物笛大鼓長刀壹振、御仕度の狩衣あじろ金裏陣

笠、馬具の乗替共金の采配御腰ニつけ

五番御後乘薩州様御人數、大將貳人馬乗

但し四人ッ、一隊、尤隊長者六七人、以前の通の御仕度銘々鐵砲人數貳百五六拾人位

右之通被爲入、其夜者四方の御使者門前ニ市をなし、翌日ニ慈恩寺始として、當郡之朱印地

不殘御見舞參拜仕候

〔山寺文書〕

乍恐以書付奉申上候

立石寺住持優田謹而奉申上候、當寺之儀者貞觀二年、開山慈覺大師蒙

清和帝之勅許創草仕候、後三百八十町立石倉印之鑄置被下置、領地罷在候處、素々僧家之

儀ニ御座候得者、武家與難相爭年代時移リ、騷亂毎ニ自然近郷之地頭領主を領地被押狹當

徳川家ニ至高千四百貳拾石之朱印ニ相改居候、然ニ今般王政復古之被仰出ニ付、朱印地

之分御改相成候段奉承知候処、從來徳川家之寄附地與申儀ニ無御座候間、被爲垂皇恩慈

而此迄之通寺領安堵仕、衆徒并末門寺中小前末々迄、動搖不仕様被成下置度候、此度當州

御鎮撫ニ付、御用途ニ茂相立申度之處、僧家之儀難相及候間、寺様相應之御用被仰付

被下置候ハ、冥加至極ニ奉存候

御本陣迄罷出可奉願上儀ニ御座候處、此節病氣罷在乍恐以代僧奉申上候、前件願之趣旨御

聞届被下置候様、伏奉仰恩裁候誠恐頓首

東叡山寛永寺支配

羽州村山郡山寺

立石寺住持

五佛院

〔水野家乘〕

慶應四辰年四月

同十九日、當所御晝休、同夜天童御泊ニ付罷出、同廿日御逢ニテ、庄内征討ニ應援ノ出兵來ル、廿四日迄新庄へ可爲着陣旨、御達書御渡アリ、同廿三日分隊一番手隊長友松彌五左衛門引

卒シ新庄へ出張ス

同年同月同日、酒井忠篤、副總督澤宣嘉兵ヲ率テ出羽ニ入ルト聞キ、家老松平甚三郎ニ清川口ヲ、同酒井兵部ニ大綱口ヲ、石原倉右衛門ニ吹浦口ヲ守衛セシム。

〔酒井世紀〕

同月十九日、松平甚三郎を清川口に、酒井兵部を大綱口に、石原倉右衛門を吹浦口に、各諸隊を附て遣はし國境を警衛せしむ。是より先に村山郡の取扱地受取らんとて、郡奉行大島久彌井ニ郡代高橋省助を遣はしけるに、近藩の奸人等庄内竊に徳川家恢復の計を運らし、領地受取を名として、近邑を占領せんとする旨告訴せしかば、總督府ハ近藩の兵を催促し、庄内を征伐せしとて、我封境に迫るの聞へ日々譁し々れり、如何なる變有らんも測り難しと、兵を出して諸口を警衛せしむる者なり。

同年同月二十二日、澤宣嘉天童ヲ發シ尾花澤ニ次シ、明日新庄ニ入ル。

〔諸説聞書〕

松浦氏所藏

廿二日、雨天ニ候処、御總督様御駕籠ニて被爲遊、尾花澤泊リ、廿三日新庄へ被爲入候、此度吉田大八計御先導役ニ而供奉之由。

〔万覺留〕

四月廿三日、

一 全日澤三位様御着ニ付、出役之面々四ツ時熨斗目上下ニ而、南御本陣江相詰、然る処熨斗目

上下ニ不及候趣、御目付ハ御沙汰ニ付、割羽織袴高ニ着替足袋も相用申候、

一 御同人様今朝尾花澤御出馬、名木澤御晝舟形御休ニ而、南御本陣江八ツ時過御着被爲濟、右ニ付御門前ハ御先立御立關前ニ而平伏、夫ハ程合見計直々天氣伺御見舞御着、御怡之御使者松井紀右衛門殿勤之、御口上書左之通、

益御機嫌能遊御到着恐悦至極奉存候、依之奉伺天氣候、猶亦御機嫌之御左右も相伺度、以使者申上候。

御名使者、

松井紀右衛門。

別段左之通演說、

中務大輔儀早速參上可仕候得共、持病未碇と不仕候間、先以使者申上候、右之通御取次江應接申上候処、被爲召御逢御丁寧之御意被成下之、

一 其後以御使者左之通被進之、舟生源右衛門出渡、直々勤之御目錄左之通進上、

鹽鴈、 七、

御樽、 一荷、

以上、

御名、

御實名、

右御使者相勤候処、御逢御懇之御意被成下之。
一大山格之助へ御手元より御側御使者を左之通被成之、別段薩州長州御人數へも被下候間、致傳達吳候様申送候。

覺

- 一家鶏 二
- 一酒 三升
- 一鶏卵 千五百
- 一酒 壹石
- 以上

暖和之砌於御國表、御總容様愈御機嫌能被成御座、珍重之御儀ニ思召候、將又山海遙遠之処御無異御到着一段思召候、當時勢柄嚙々御心配御骨折可有之察入候、兎角不行届之家來共ニ而候得者、万端無伏藏申談給候様御頼思召候、隨而御尋問之驗迄午目錄之通御贈入候以上。

御名

御側使者

門屋 百助

一三位様御附之兼左之通

伴野 庄司 薩州隊長

瀧川内藏助

和田九左衛門 岡本彦太郎

北原東五郎 長州隊長 戰兵八十六人

田口 數馬 桂 太郎

泉 恕助 上野捨藏

土屋 源吾 戰兵百八人

醫師 掠木順快

一暮六ツ頃より急ニ薩長御人數出張、清川口江攻入早朝原卷岩并其次之屯所迄追込、三ノ屯所ハ御殿林ニ而攻方六ツヶ敷、味方及難儀候間繰込吳様古口出張之御人數迄申越候ニ付、舟ニ而繰出戸川迄押出候処、薩長之兵引揚來リ、右差圖ニ而一旦元ノ陣所江引揚候由注進申來候。

一右戰爭ニ而手負死人共十一人程有之、内一人彼地ニ而即死、其外一二人終相果候由、敵方ハ三拾人餘も相果候由。

四月廿四日

一今曉より之戰爭ニ而、夜ニ入候而追々手負人送り越候ニ付、爲見舞余語助右衛門御使被仰付、松井松讚同道薩長兩陣所へ罷越候処、兼而長州醫師頼置候間、先其方江任可申、乍去若無餘儀者御頼可申、段々被爲入御念御儀難有旨、薩州中村彦右衛門長州伊藤助九郎挨拶有之。

同年同月二十四日、澤宣嘉兵ヲ出シ、酒井忠篤ノ所領清川ヲ進撃ス、薩長並ニ新庄ノ諸藩兵力戰勝スシテ退還ス、忠篤清川口ノ急ヲ聞キ、家老石原平右衛門番頭酒井吉之丞等ニ赴援セシム、又急騎之ヲ酒井兵部ニ報シ、兵ヲ進メテ白岩ニ陣シ、村山郡ノ料地ヲ鎮撫セシム。

〔酒井世紀〕

同月廿四日、平明鎮撫使護衛の薩長諸隊へ近藩の兵加はり、腹巻岩の嶮を踰へ、清川驛へ乱入して發砲す、松平甚三郎か諸隊應戦し、數時間の後辛ふして追ひ退くると雖も、事倉卒に起りたれハ、味方死傷する者多し。

〔諸説聞書〕

廿三日之夜薩長之軍勢者、尾花澤ハ別れ古口邊、庄内相固め候場所馳付、戰爭相始り申候、死亡けか之人々、長藩手負三人、討死貳人、但し新庄表へ厚く葬候由。

〔藤井御傳記〕

二十一日、松平成之進信徴を隊長として、二小隊を率ひて出發なさしめらる、二十三日信徴等新庄領に着陣し、夫より古口へ進軍。

〔戊辰庄内戰爭錄〕

此日(二十)遊軍トシテ、晝後ヨリ鶴城出發セシ人數如左。
家老、石原平右衛門(以下)

同日應援トシテ、晝前鶴城ヲ發セシ人數如左。
組持番頭、酒井吉之丞(以下)

〔同上〕

此日夕刻ニ至リ、大網口エ鶴城ヨリ御乘馬ヲシテ、清川エ襲撃セラレシ趣ヲ報ス、引續キ辻庄一郎(番使)ヲシテ、乗切ニテ同所ニ行シメ、清川云々ニ依リ、大網口守兵ハ白岩迄押出シ、要地ニ陣シ固守鎮撫ヲ專トシ、進テ敵ヲ求ムヘカラストノ嚴命ヲ兵部ニ傳フ。

同年同月二十五日、酒井忠篤ノ將酒井兵部、部署ヲ定メ軍ヲ率ヘテ、六十里越ヨリ進ミ志津ニ次ス、明日白岩ヲ經テ慈恩寺ニ陣營ス。

〔戊辰庄内戰爭錄〕

四月廿五日、兵部カ一手午前七時過出發シ、六十里越ヲ經テ志津ニ宿陣。

四月廿六日、兵部カ一軍ハ、午前七時頃志津ヲ發シ、白岩ヲ經慈恩寺ニ陣シ、村山郡地所鎮靜ノコトヲ謀ル、(略中)此日平太夫(細)其隊四五人ヲ具シ、白岩近邊ヲ巡村セシ所、左澤邊ヨリ鎗及弓砲ヲ持セ、主從十餘人列ヲ正シテ出來ル、其体傍若無人ナリ、依テ先導ノ者ヲシテ姓名ヲ問シメシニ、大谷村ノ住大谷外記少輔カ用向有テ、仙臺エ通ルト云、平大夫直ニ白岩ニ歸ルニ、藤助(石)ト驛外ニ逢テ此コトヲ語ル、藤助曰外記ナラハ名ニ聞エシ惡徒ナリ、捨置マシト追駈シニ、慈恩寺前ノ茶店ニ息セリ、本營ニ於テ尋ヌヘキ子細アリト、外記及三浦藏人其餘ノ者共連來リ、白岩ニ於テ主將ニ之ヲ述テ、三組ヨリ輕卒十二人ヲ遣シ、捕縛シテ本營ニ出ス。

〔諸説聞書〕

頃者四月廿五日之夜、庄内勢凡三百人餘六十里越ニ而、本道寺泊リ寒河江柴橋、同月二日ノ遺恨ニ候哉、次第ニ押來候段天童へ注進有之、俄ニ御屋敷ニおゐて御仕度之御觸、追々物見のもの馳歸リ、依之會所より市中不殘、家財所片付申候様之御達し、廿五日九ツ時分并桁屋の書狀到來、家内其外丸吉金吉の人数召連れ、荷物持運ひ申候、然る内西郷の風聞窪野目村の注進、當日白岩ニ而晝飯慈恩寺山上ニ立籠リ可申由、速ニ天童へ乗出様ニ相見申候處、過半寒河江邊に參り候由、仁田溝延を渡船可致と申、委細天童へ注進いたし候處、天童様御人数不殘仕度出來、則剋繰出しニも相成可申様ニ御座候間、一先走歸リ申候、天童ハ勿論御領分其外田井藏増寺津、最上川兩邊の村々騷動大方あらば、庄内勢ハ先川西へ急速罷出様廻狀ニ而、名主共銘々印形取立申觸、御高札ハふみ割、大杭ハ酒井左衛門尉領分と俄ニ書直させ、寒河江郷藏の兵糧として爲持運候、米ハ幾千とゆふ數不知候由、其夜近郷の人数へ、慈恩寺口々の番させかゝり火たき、實嚴敷相固め申候、まかし互ひ臆し候哉、戰爭無之。

〔齋藤氏記録〕

清水佐十郎の宿狀。

〔前文略ス〕私共出立之節ハ、大網迄之様ニ被仰付居候得共、村山郡へ被罷越候様兵部様御沙汰ニ而、當廿五日大網發足ハ、志津へ旅宿、同廿六日同所出立、白岩迄出張ハ、候處、慈恩寺與申處迄出張ニ付、御人数不殘三ヶ寺江御逗留ハ、居候御物頭三人組子少々召柴橋へ罷越候處、河野俊八ハ仙臺へ參り居候よし、寒河江江も外人数ハ居不申趣、同所ハ注

進有之、天童人数も多分ハ新庄へ罷達候よしニ而、同所ハ新庄へ注進ハ、し事ニ相聞、山形人数天童へ貳百人余參リ候事ニ注進有之候、右之次第ニ付大混雜ニ被在候、私共兩人軍事元方ニ而受拂方被仰付、何分御存知之通り之仕拂方ニ而、大閉口ハ、し早坂ハ給斗リ着ハ、し居候付、私綿入肌子壹枚貸遣し置申候、荷物ハ御廻し被下候へ共、逆も間ニ合不申候付、大網迄參り候へハ、同所ニ差留置候様肝煎へ被申付置候。

一 慈恩寺旅宿ニ而上下あし、丸飯ニ汁澤山ニ而給候仕末ニ御座候、何分大勢之事故、夜具ハ上斗り壹枚貳枚も、私共ハ壹枚も是あく候、御徒目付源次文右衛門御足輕目付佐藤吉之助、早坂外ニ御荒子壹人、私共御用之爲召連置、昨日ハ今日も右之人々同宿いハ、明日ハ何様ニ相成可申哉、大混雜筆紙ニ難申上候、御金ハ其廉々兵部様を受取、外ニ御元ハも無之、誠ニ軍サ之世之中ニ相成候も、跡々ハ何分ニも不掛御目、御威光被成候様奉願上候。

四月廿六日夜認置。

尙々天童之大八も、此頃新庄へ出張之よし相聞候得共、右之方早々引上ケ候事ニも相聞、其上天童ハ操出しニも相成可申、其節一戦いハ、し心組ニ御座候、以上。

追々暖和相成申候、皆々様御機嫌能被成御勤候半、奉存候、隨而私儀も至而無事、昨夜村山郡之内、慈恩寺へ一同一宿罷在申候。

一 召捕もの五人位有之候。

一 昨夜中村治郎兵衛殿組芝橋へ參り候所、天童之人数あんど不都合もの有之趣ニ而、不殘引取候由、金子貳箱并大砲等之物拾置候品もの、不殘分取り高名いハ、し當處江持參也。

- 一 晝夜とも休候事も不相成、乍思申上兼候。
- 一 後刻之程も難斗候得共、今日中天童江操出候半、與存候、何レ御勝利之御模様ニ奉恐悅候。
- 一 山形上ノ山人數操出、天童江罷在候趣、只今參り申候。
- 四月廿七日明ケ之認。

(廿六日之狀)

- 一 今日志津明六ツ半時御立七ツ時白岩へ被遊御着、是レ慈恩寺へ御操出被成候御都合ニ御座候。
- 一 吉田大八手ニ而御家へ弓引候もの兩人召捕、外ニ壹人柴橋手代河野俊八と申者召捕候、爰許至極御都合宜御座候、村々人足等面々願出候仕合御座候、途中故諷と申上候、宜敷御申上可被成下候。

松井文四郎

難波權四郎様

坂本 吉次様

同年同月二十六日、大谷村白田外記東根村三浦藏人等、將ニ總督府ノ軍ニ赴カントシテ白岩ヲ通過ス、會々酒井兵部ノ候兵ニ逢フ、衆寡敵セズ遂ニ縛ニ就ク、明日白岩臥龍橋畔ニ斬戮セラル、後朝廷両氏大義ノ爲ニ力ヲ效シ、屍ヲ軍中ニ暴セルヲ追悼セラレ、其墓ヲ吊シ金幣ヲ賜フ。

〔戊辰庄内戰爭錄〕

一 昨日召捕ル所ノ大谷外記コト、社人ニ似氣ナク兵器ヲ持、會津征討ノ筋仙台ニ屬シ、討罰ニ從事セント願出タルハ、咎ムヘキ程ノコトナラスト雖モ、村山郡ノ内己カ領地ニ成タル杯ト偽言ヲ唱へ、種々詭言ヲ以テ人心ヲ動搖セシメ、又天童藩エ牒シ合セ誣告セシ等、正シク本人ノ日誌ニ有之、其罪免レ難ケレハ、其由申聞セ白岩橋ノ側ニ於テ斬首セシム。

〔慶應軍記〕

斯ク難所ヲ終日歩ムト雖モ遅レヲ取テハタマラジト、獅子文鎮ノ如ク勇猛ヲ震へ、翌辰ノ一天ヨリ八聖山横軸石倉水澤追分ケ海味道筋威風凜々トシテ早白岩驛ニゾ陣營ナリ、本陣ハ加賀ヤ半右衛門、白岩驛廣ロシト雖モ一軒モ無殘先ツ兵糧ヲ使へ、人氣ヲ休メ斥候ノ兵隊ヲ使シ窺ル、大谷村白田外記三浦藏人俱々雜兵ヲ引卒シ、慈恩寺三ヶ寺ヨリ金子五百兩欺キ掠メ、澤畑四郎兵衛阿部權内ト申富貴ノ民ヨリモ武具類等ヲ借り受、軍裝束花ヤカニ此上ハ仙臺表ニ罷越九條殿へ欺願ノ奉リ、元ノ通り徳川御朱印同様ニ可致トテ、夫ニハ中々金子不足ニテハ叶マシ、地獄ノ砂汰モ金次第トアレハ三箱ツ、モ澤畑分限ニ金主爲致可申トテ、サモ小大名ノ如ク海鉢ノ旗指物ヲ翻シ、白岩臥龍橋ト申橋ノ傍ニ鶴立ミ何ノ思案モナク扣居リケルカ、庄内一ノ手堀平太夫ノ兵隊斥候ニ出シカハ、白田ヲ見ルヨリ一禮シ何方ノ藩ニテ候ゾ哉ト尋ルニ、白田ハアト答ヘテ曰、私ハ大谷村神職惣神主頭白田外記ト申者ニテ候ゾト申ケレハ、直サマ此由堀平太夫へ斯ト告ケルニ、堀平太夫其神主外記并三浦藏人腹心ノ家來三人ノ輩怪者召捕來レト下知アレハ、斥候ノ兵隊大キニ歡ヒ則其

意ニ從ヘ白岩驛九屋清右衛門方イゾ連レ來リ、生捕ノ者曲者成リ油斷スルナト有ケレハ、三人ノ輩忽繩目ニ相及ヒケレハ、物ヲ不言東方ニ暮テ居リケルニ、庄内ノ惣勢慈恩寺山ニゾ陣營ナリ、本陣ハ寶藏院花藏院最上院此三ヶ寺、陣營透モナク兵隊充滿セリ、然ルニ白田三浦ノ兩人家來地替大八郎俱々繩目ニ相暨ヒ召連、石原東助等嚴シク詮儀致シ候処、申晴レ少シモ無之終ヘ糾明ニ相及ヒ、不當ノ義等品々有之迎モ等閑ニ拾置難ク、此ノ兩人ヲ血祭リセヨト酒井兵部宣ヘケレハ、堀平太夫畏リ即刻此寺内ニテ伐リ捨テントテ大太刀カラリト板キケレハ、コハ何事ヨ最上院俄ニ禮儀正シク八丈袈裟ヲ長々ト引纏ヘホツスヲ持、大音雷ノ逆スル音聲ニテ堂塔伽藍ニ響キ渡リテ、コレモウ、庄内ノ隊長衆無禮ヲスルナ、御開給ヘ耳穴アケテ入給ヘト、抑此慈恩寺ト申スルハ難有モ往古ヨリ寺領貳千七百石以上ノ御朱印ニシテ、聖武帝ノ御創業天平寶治ノ頃ヨリ開山ニシテ、天笠ノ婆羅門僧正下ラセ給ヘ、天臺眞言ノ二宗ヲ開カセ、本尊彌勒菩薩ヲ安置シテ先帝御歷代ノ御位牌德川歷代ノ御位牌等ヲモ安置シテ、日夜ノ念佛眞言不怠一時休ムル障モナク、香雲梵行絶ルナク殺生禁斷ノ道場也、一分ノ虫モ害スルコト未許レユ、血祭リ杯トハ穢ラハシ、此寺内御引去リ御勝手成サルベシト大音上レハ、庶人恐ヲナシ是ハ最上院ニ怒ラレテ白田ハ助リタリヤト云フモアリ、斯テ白田三浦ノ兩人ヲ縛リ付後口手ニ廻シ、白岩臥龍橋ノ傍松ノ木ノ下ニ連レ來リ、一ノ手堀平太夫新身ノ刀ニテ白田ヲハツタト首ヲ伐リ落シ、土屋新三郎ハ三浦ヲイカ者造リノ太刀ニテハツタト首ヲ伐リ落シ、兩人共ニ臥龍橋ノ傍ヲ同シ枕ト失セニケル、此時殺氣天ニ登ル、軍令ヲ以テ凱聲三度上ケレハ、此音聲白岩近在ハ云フニ

不及響キ渡リテ天地モ崩ル、計リナリト、肝魂ヲ冷カサヌル莫リケル、其晒シ者ノ札ニハ、此者何ノ言ワレモナク惡道ヲ企候ニ付、獄門ニ被行者也。

白田外記三浦藏人右同斷獄門ニ行ハレ、先ツハ庄内ノ血祭リトゾ成リニケル、白田手下二十人はモ奸惡ナルベシ、不殘首ヲ刎ント庄内若氣ノ銃士噪立既ニ爰ヨト見ヘケルニ、其時小文治押しメ必シ助ケ可被下、彼ノ手下ノ難兵何ノ工夫モナク、時ニ心ヲ移シ附從フノ者共ナリ、却テ穢レナルヘク候條御扣ヘ可被下ト申ケレハ、小文治カ一言ニテ庄内ノ銃士無益ノ殺生扣ベシトテ右ノ人數ヲ許ルシケレハ、貳拾人ノ輩ハ小文治カ一言ニテ助ケラレ、籠ノ小鳥ヲ離スカ如ク足ニ任セテ逃走リ漸々生タル心地セリ、又白田三浦カ屍ヲ道ノ真中ニ棄テ置キケレハ、若キノ士ハヤリ立テ胴ハ會スカヒスヲニセント、既ニ胴ヲモ倒シ切ラント有リケレハ、先刻ヨリ白岩町ナル道具屋次郎吉太郎松ノ兩人、念佛唱妙數拾篇ニテ涙ヲ流シ居リケルニ、偕々不便ノ有様ナリ、庄内ノ御隊長ヘ願上屍ヲ吊ヘ吳レント、右ノ次第ヲ堀平太夫ヘ願イケレハ、平太夫申様屍ノ儀ハ一應血祭リ相濟候品ニモ有之、屍ハ望ミノ者ニ任セ可申候條勝手タルヘキト申サレケル、直々非人頭鐵五郎等ニ申付ケ屍等ヲ仕廻致サセ、持道具ノ儀ハ大谷村白田カ宅ニ送ラレケレハ、白田カ妻子驚轉シ喚キ叫ンテ泣ニケル、三浦カ妻子諸共ニ稚キ小兒ヲ抱キ付ケ、如何シャウト泣キ立ル目モ當テラレヌ形勢ナリ、斯乱世ノ時節迎老少不定隔テナク、生者必滅如何成因果ノ処爲ナルト、斯テ有ヘキ事ナレハ屍ノ儀ハ大谷村永林寺ヘ葬リ、所ノ者ニ至迄厭ト念頃ニ吊ヘケル、三浦カ妻子稚キ者トモハ白田永代扶助ノ證文アリケレハ、兎ニ角養育有ルヘシト屬シ、死シテノ後ニ至

ル迄白田カ家内同様日數ヲ送り暮シケルコソ哀レナリ。

〔白田家文書〕

外記少輔白田秀則略履歷。

白田秀則幼名万千代ト曰フ菅原朝臣ナリ羽前國村山郡大谷村ニ居リ世々天滿神社ノ神主タリ、舊朱印地廿四石六斗餘ヲ領ス父ハ丹波正清安ト曰フ天保六年秀則年甫十一ニシテ累ニ祖父母父母ヲ喪ヒ從祖父宮内秀與ニ養ハル嘉永元年舊神道長上吉田家ニ就テ神職ノ繼目ヲ請ヒ是ヨリ外記少輔ト稱シ秀則ト名ツク性篤志ニシテ活潑ナリ義ヲ見テ身ヲ觀ミス嘉永五年下社人櫻井伊三郎ト社領山林ヲ争ヒ其領主白川藩ニ陳述スレモ意貫カス由テ幕府ノ寺社奉行ニ出訴スルコト再三ナレモ志達セスシテ毎ニ領主ヘ引渡サレ禁錮セララルコト四度ニシテ終ニ永牢ヲ命セララル妻澄子理ノ直ニシテ反テ冤枉ヲ蒙ルヲ見ルニ忍ヒス安政四年十月婦人ノ身ヲ以テ竊ニ郷里ヲ脱シ幾許ノ艱苦ヲ嘗メ仙臺藩主伊達家ニ投シ情實ヲ具陳シ夫ノ萬死ヲ免レシメンコトヲ請フ同家聞テ之ヲ憫ミ事ノ本末曲直ヲ親ラ白河藩ニ通ズ然モ事未遽ニ判決セズ或ハ澄子幼女ヲ抱テ三年獄ニ墜ガレ或ハ秀則江戸ニ在テ又入牢セララルナド千辛萬苦言フベカラズ彼レ是星霜七周ニシテ文久元年ニ至リ志始テ達スルコトヲ得タリ又併テ伊達家再生ノ恩ナリ時ニ尊攘ノ說四方ニ起ル秀則大ニ感激シ身ヲ以テ國ニ報ルノ志益々切ナリ明治維新ノ年三月鎮撫總督仙臺ニ着セラレ諸藩ノ兵ヲ部署シテ征討セラル所アリト聞キ秀則奮然トシテ起テ曰ク身ヲ致ス可キノ時ナリト是ニ於テ約スル所ノ同志ヲ招キ義農ヲ募リ子息秀直ト共ニ兵ヲ率ヒ

三月十八日郷ヲ發シテ仙臺ニ赴キ伊達家ニ因テ意ヲ總督府ニ達シ征討ノ官兵ニ加ハラシ事ヲ請フ直ニ許可アリ且伊達家ヨリ感狀ヲ副テ太刀一口ヲ與ヘラレ命ニ由テ即日督府ニ詣リ數條ノ策ヲ上ル獻策ノ副本ハ秀則死スル日尋テ歸郷シ更ニ有志農兵ヲ招集シ兵器輜重等ヲ足ラシメテ督府ニ赴ント欲ス是時ニ當テ庄内藩ノ兵當郡寒河江柴橋兩地ナル幕府ノ陣屋ニ據テ其土地人民ヲ私有シ其所爲暴乱ナルニ由リ四月三日軍事參謀局ヨリ秀則ニ飛書ヲ與テ庄内之暴藩追討之儀被仰出速日進撃アルヘキニ付先參向之儀ヲ扣ヒ其地ノ軍務周施ヲ擔當ス可キ趣ヲ命セララル秀則即時ニ兵ヲ會シ秀直ト共ニ夜分發程シテ陣ヶ峯ニ到ル是時寒河江柴橋ニ據レル庄内兵等官軍ノ進撃ヲ恐テ走ル者吾兵ノ來ルヲ望テ轉狼狽シテ潰散スト云フ後ニ聞テ知ラザリシヲ憾ム然ルニ官軍ノ進路ヲ聞カサルヲ以テ多ク斥候ヲ遣リ是夜ハ東根村三浦千秋カ家ニ屯ス翌四日昧夾笹谷關山ノ兩斥候來テ官軍ノ進入ヲ報ス由テ直ニ兵ヲ發ス來リ加ル者三浦千秋ヲ始メ小池啓太郎中目玄珣等益多シ共ニ馳テ寒河江ニ到リ官軍ニ加ハル然レモ賊兵既ニ去リ地方平定スルヲ以テ官軍ハ日ナラズシテ半ハ凱旋シ其地ハ仙臺藩ニ預ケラレシヲ以テ吾兵同地八幡神社々人幡倉滿江ニ託シ秀則ハ一時民政ニ加ハリ出仕セシニ庄内ノ兵再ヒ乱入スル由ノ聞エアリ由テ三四小隊ノ兵ト防戦ノ策ヲ議シ敵ノ動靜ヲ察スルニ當リ十九日參謀局ヨリ書ヲ以テ招カル然レモ再ヒ仙臺ヘ赴カンニハ此地ノ處分ヲ終ヘサル可カラザル者少ナカラズ由テ未發セス廿一日ニ至リ三浦藏人來テ其母ト幼子三人トヲ秀則ニ託シ其身ハ秀則ノ周旋ニ由テ軍ニ從ハンコトヲ請フ而シテ秀則未タ仙臺ニ赴クコトヲ得ス廿

三日秀直ニ農兵數人ヲ與ヘ先ツ督府ニ詣テ秀則遲延ノ情狀ヲ稟セシメ其廿六日秀則乃チ惣勢幾十人ヲ率井將ミ督府ニ詣ラントス陣ヶ峯ニ到ル時ニ庄内兵不意ニ出テ之ヲ圍ム彼ハ衆我ハ寡ナリ重圍ヲ奈何共スルコト能ハス力屈シテ三浦藏人菅井大八橋本又五郎ト共ニ擒ニセラレ慈恩寺ニ撃カル夜半ニ看守少ク怠ル秀則聲ヲ潜メ三人ニ謂テ曰ク吾不幸ニシテ志ヲ達セス賊ノ爲ニ此地ニ死ナン汝等圖テ萬死ヲ通レ仙臺ニ走テ秀直ニ告ケ吾ニ代テ國ノ爲ニ力ヲ盡セト翌廿七日賊ノ本營白岩村ニ轉撃セラレ其日秀則藏人二人ヲ陣ヶ峯ノ橋側ニ坐セシメ賊兵四方ヲ圍ミ二人ヲ責テ曰ク官軍ニ媚ヒ數世ノ恩ニ負キ德川家ニ敵ス罪大ナリ我兵今主家ノ爲ニ進ミ先汝等ヲ得テ手初メヨリ二人ノ首ヲ斬テ軍神ヲ祭ント秀則怒テ大義ノ存スル所ヲ論シ賊衆之ヲ制ス秀則激益甚シ賊ノ先鋒長堀平太夫密ニ秀則ノ背ニ出テ聲ヲモ發セス不意ニ之ヲ斬ル藏人ソノ狀ヲ見テ大ニ怒リ口ヲ極テ其不義無禮ナルヲ言ル賊兵等乃チ手銃ヲ以テ藏人手足ヲ乱打シ後ニ之ヲ斬リ我カ器械ヲ奪テ去リ天童ヲ襲フ然シテ我兵ノ免カル者大半ハ死者ノ言ヲ守テ仙臺ニ赴キ餘ハ恐レテ散走ス賊兵更ニ秀則藏人ノ家族及ヒ同志者ヲ求ムルコト甚タ嚴ニシテ家族等身ヲ容ルニ地ナク山谷ノ間ニ離散ス匿レテ賊ノ鎮靜ヲ待テ僅ニ一生ヲ万死ニ得タリ

二月遺骸ハ其廿九日秀則ノ親戚及大谷村永林寺住職等相謀リ庄内藩ニ請得テ之ヲ其寺域ニ葬ル秀則文政八年二月十五日ニ生ル享年四十四ナリ其後明治七年七月山形縣ヨリ達ニ由テ二人ノ墓碑并玉垣基門等造目論見ノ明細簿ヲ上リ翌八年十月廿日權縣令ヨリ

白田外記少輔基乏自今官費ヲ以テ修繕掃除ノ旨ヲ達セラレ其十一月墓碑新造官立ノ旨ヲ達セラレ九年六月聖上與羽御巡幸ノ際仙臺行在所ニ於テ本縣參事薄井龍之ヲ召サセラレ戊辰ノ役國事ニ斃レシ者ヘ金幣ヲ賜ヒ靈魂ヲ慰ム可キ旨仰出サレ七月十四日本縣十三等出仕小池春蔭ヲシテ墓前ヲ吊ハセラレ宣命ヲ奉讀アリテ金幣ヲ供セラル十年六月一日墓碑成ル本縣令アリテ從軍殉國之墓ト稱ス其三日縣ニ請テ十年祭ヲ行フ其十一月十二日秀直ニ命シテ墓守ヲ兼務セシメラル

〔同上〕

- 一 白田外記少輔菅原秀則幼名万千代ト號ス
- 一 元諸侯阿部美作守管轄地羽前國村山郡大谷村居住天滿神社神主同村ニ於テ元朱印地高二十四石六斗余受領罷在候
- 一 秀則ハ文政八年乙酉二月十五日山形縣羽前國村山郡大谷村ニ生ル
- 一 祖父ハ白田宮内少輔秀信父ハ白田丹波正清安清安ハ陸前國伊具郡木沼村元修驗宗呼院良廣次男母タイ祖父秀信カ長女
- 一 明治元戊辰年四月廿七日村山郡白岩村地内字陣ヶ峰橋ノ側ニ於テ斬首セララル子時年四十四同月廿九日同村曹洞宗永林寺ニ葬ル碑名
- 官軍附明治元年戊辰四月廿七日陣ヶ峰ニ於テ爲賊落命子時年四十四歲
- 故神主白田外記少輔菅原秀則墳墓
- 明治七年四月廿七日 長男白田秀直謹而建之

一天保六年、祖父母始家族六人引續キ病死、外記少輔于時年十一孤ト成リ、祖父秀信弟宮内秀興カ後見ヲ以テ養育セラレ、長ト成リ嘉永年中舊神道長官吉田殿ノ繼目ヲ請ヒ、神主外記少輔秀則ト号ス、性篤志活發義ヲ見テ身ヲ不顧、嘉永五年二十八歳ノ時、同社元下社人櫻井伊三郎ナル者ト、舊社領山林ヲ申争ヒ、舊幕府奉行所ニ出訴、再三ニ及ト雖モ志ヲ達セズ、其都度却テ領主ニ被引渡、禁錮セララル、コト兩度、三度目ニ至テ彌永牢ノ所置ヲ蒙ル、于時其妻スミ其苦ミヲ見ルニ不忍、安政四年十月居里脱走、舊仙臺藩主伊達慶邦殿ニ圖リ情實ヲ具陳ス、万死ヲ免レンコトヲ乞フ、舊侯之レヲ憫ミ、其旨趣曲直ヲ親シク舊領主ニ達スルニ及ヒ、三年ニシテ秀則カ一生ヲ得、家族集社職ヲ全フシ、文久元年ニ至テ本意ヲ達セシモノ、全ク伊達家ノ惠ニ依ルト爲シ、肺肝ニ銘スルコト年アリ、王政復古大政御維新ノ時ニ際シ、戊辰一月伏見表御戰後賊兵諸國屯集、直ニ御追討被仰出、三月上旬鎮撫御總督府仙臺ニ御下向先鋒應援等夫々諸藩ニ命セラル、ト聞キ、以爲ク今ヤ安眠坐食ノ時ニ非ス、同志ヲ求メ農兵ヲ募リ、三月十八日發程仙臺ニ赴キ、兼テ仙臺家ニハ前顯云々ノ所以モ有之候間、御家ニ據リ父子共賊軍御追討ノ兵ニ加ヘラレンコトヲ相願候處、許可ヲ蒙リ御家ヨリ太刀一振ヲ賜リ、御本陣ニ參上可仕旨懇ニ被仰出、數條建言等仕右控等ハ秀則藩命ノ稱候ハ一先ッ歸村、猶同志農兵集合武器會計等ノ用意罷在候處、其頃當國庄内ノ舊藩主酒井家ノ兵隊、當郡寒河江柴橋兩舊幕府陣屋ニ據リ、右管轄地并人民共私有相成リ居リ候處、四月三日仙臺表ヨリ辭令ヲ以テ、今般庄内御追討被仰出、近々御進擊可相成ニ付、參向ノ義ハ先差扣當地ノ軍事周旋等擔當可仕旨被仰出候間、早速出張國境ニ於テ合隊ノ心得ヲ以テ、同

日午後七時頃ヨリ、愚子秀直ヲ始メ、農兵一同隨從發程、途上陣ヶ峯寒河江柴橋ノ屯罷在候庄内ノ兵隊、官軍御進發ニ恐服シ、俄ニ自城ニ引揚ノ途中ト行逢ヒ、彼兵再周章散走仕候ヘ共是ト心モ不附行逢、且御軍線込ミノ道筋モ判然セサル故、同郡東根村三浦千秋方ヘ屯シ、翌四日早朝國境毎ニ物見ヲ置キ、否ヤノ報知ヲ相待テ候處、既ニ御軍線込ノ趣ニ就キ其地直ニ發足、尤近邊ノ同志三浦千秋ヲ始メ、小池啓太郎中目立珣其他追々馳加ハリ、共ニ寒河江ニ出張合兵候得共、最早敵兵退散暫時御平鎮不日シテ官軍半御歸陣、土地ハ伊達家ニ於テ御預リト相成リ候間、同所八幡神社元社人幡倉滿江方ニ屯シ、一時民政ニ差加ハリ出仕中、猶庄内藩兵再度乱入ノ風聞粗々有之候ニ付、繼カニ仙臺藩三四小隊ト心ヲ合セ、頻リニ防戰ノ計策ヲ議シ其用意最中ノ処、四月十九日ニ至リ柴橋陣屋詰管長河野俊八鎮撫御總督府ヨリ、當郡司代格拜命ノ趣ヲ以テ諸藩ニ披露ニ及ヒ、仙臺侯ノト相代テ引揚ケ、故ニ外記少輔ヘモ早速御本陣ヘ參向仕ル可キ旨申來リ候間、一先ッ歸村猶出張ノ議、長男秀直ニ向ヒ、汝先ッ吾ニ先ジ仙臺ニ參向シ延引情實ヲ申立ヨト、軍禮出戰心得方等嚴懇ニ示シ、農兵少々差添エ翌二十三日發セシメ、同二十六日外記人數召具シ發程通路途中陣ヶ峯ニ於テ豈斗ランヤ、再度乱入ノ庄内人數行逢フヤ否ヤ、彼レ多兵ヲ以テ取圍ミ、有無ヲ論セス擒ト爲シ、其夜ハ近里慈恩寺村ノ陣中ニ擊ル、深更ニ及ヒ番兵ノ聊カ弛ムアリ、時ニ引率ノ人數ノ内ヨリ、三浦藏人菅井代八橋本又五郎ナル者同シク嚴捕セラレ、竊ニ右三名ニ向ヒ聲ヲ頻ニ卑クシ嘆示シテ曰ク、吾今不運ニシテ心ヲ達セズ、賊ノ爲メニ此処ニ死シ、汝等何レニモ謀リ万死ヲ通レ、行テ仙臺ニ走リ、嫡子秀直ニ此事ヲ告ケ、我レニ代リ國ノ爲メ力ヲ盡

セト、翌二十七日白岩村本陣ニ捕縛セラレ、同日近邊陣ヶ峰橋際ニ外記藏人兩人ヲ引据總兵並居、參謀ナル者兩人ニ向ヒ責メテ曰ク、官軍ニ媚ビ數代ノ厚恩ヲ忘却シ、徳川家ニ射向罪大ナリ、吾カ兵主家國家ノ爲メ進發セリ、幸ニ先ツ汝等ヲ捕ヘ得タリ、手初メニ兩人ガ首ヲ斬リ、軍人ヲ祭ラント、于時外記忿激シ大義ヲ論ゼント爲スヲ、多兵競フテ言フ勿レト、先鋒隊長堀平太夫密ニ傍ニ寄り、不意ニ先ツ外記ヲ斬ル、藏人其次ニアリ、事ノ様ヲ見忿怒ニ不堪一義論セント、更ニ死ヲ肯セス、于時暴卒手銃ヲ以テ手足ヲ擲碎シ半死トナシ平士之ヲ斬ル、残り人數ノ器械雜具ヲ奪ヒ、大ニ鯨波ヲ作り直チニ天童ニ乱入セリ、其後外記隨從ノ人數半ハ、死者ノ遺言ヲ守リ仙臺ニ走り、半ハ恐伏シテ山谷ニ潜居ス、然ルニ庄内藩天童藩ノ兵ト戦ヒ勝利ノ後ハ、斃者ノ家族ハ勿論、同志ノ者マデ探索嚴重、各々散乱御鎮靜ノ際マデ、實ニ滅亡同様也、尤モ四月廿九日ニ至リ、外記親類等居村曹洞宗永林寺等談判ノ上、便リヲ求メ庄内藩ニ乞ヒ、兩人ノ死體ヲ居村ニ引取り、同村ノ境内ニ假埋仕リ候、

第四大區三小區大谷村居住、

故白田外記少輔長男、

嗣官、白田 秀直、

山形縣權令關口隆吉殿、

〔書上寫〕

一三浦藏人平公村通稱初息一後泰介ト号ス、

一山形縣管下元舊幕領元諸侯館藩領地、羽前國村山郡東根村若宮八幡神社元大宮司三浦筑前正義和厄介、一時元堂上中山大納言忠能卿ニ仕フ、職錄不詳又舊天童藩主織田信敏ニ仕フ、食錄二人口、

一文政七年甲申二月十六日、山形縣管下羽前國村山郡東根村ニ生ル、

一祖父三浦但馬正元知、父芦原周平、舊幕府旗下芦原某名不詳ノ男、母タミノ三浦但馬正元知ノ二女、

一明治元年戊辰四月廿七日、村山郡白岩村地内字陣ヶ峰橋ノ側ニ於テ賊ノ爲ニ斬首セラレ、于時年四拾三、同月廿九日村山郡大谷村永林寺境内ニ假葬碑名コレナシ、

一文政九年丙戌不詳父周平病ニ罹リテ死ス、于時公村年二歳、叔父村山郡東根村三浦筑前正義和方ニ母子トモ厄介タリ、天保八年丁酉歳拾四始テ志ヲ立、舊仙臺藩士由井太仲ノ門ニ入り、支那學研究スルコト五年、同十三年壬寅東京ニ登リ、武術修行スルコト年アリ、嘉永二年己酉西京ニ登リ、元堂上中山大納言忠能卿ニ仕フ、安政二年乙卯職祿ヲ辭シテ歸郷、慶應三年丁卯ヨリ舊天童藩主織田信敏ニ仕ヘ、足輕相勤ム、然ニ王政復古大政御維新之時ニ際シ、戊辰三月藩主織田氏ニ與、羽鎮撫使先導ノ命アリ、重臣吉田大八ナル者專ラ勤王ノ說ヲ首唱スレテ、藩議一々決セス、反復考量スル折柄、村山郡大谷村天滿神社々主白田外記少輔秀則ナル者、從來交リ深ク且縁類ナルニ、專ラ勤王ノ大義ヲ抱キ、同藩城下ニ尋來リ、竊カニ語テ曰ク、我仙臺藩ニ舊好アレハ、今ヨリ彼地ニ趣キ、同藩ト謀リ、王事ニ盡力セント欲シテ發鄉セリト、奮發興起頻リニ賊軍討伐ノ事ヲ說ケリ、以爲ク此ノ眩ニシテ方向ヲ誤ラハ報國

ノ素志空シク泡沫ニ屬スベシト、斷然志ヲ決シテ同心戮力ヲ誓ヘ、竊カニ老母及孩兒ヲ提携シ脱藩シテ郷里ニ走リ、面會ノ時ヲ期スルニ日ナラスシテ秀則歸リ來リ告ルニ事ノ成ルヲ以テス、然ニ其頃庄内藩ノ兵隊當郡寒河江柴橋兩陣屋ニ出張、暴舉ヲ以テ土地人民私有致シ居候ニ付、四月三日官軍薩長筑仙四藩ノ兵隊庄兵御追討トシテ進撃ニ付、秀則其他同志ノ者農兵ヲ募リ、當郡山寺井關山村ヘ奉迎ノ心得ニテ諸方ヘ斥候差出シ、一同東根村三浦千秋方ヘ屯在ノ処、官軍既ニ天童ニ御操込ノ趣報知ニ付、翌四日鷓鳴合隊ノ心得ヲ以テ寒河江出張セシ処、賊兵官軍ノ進撃アルヲ聞キ、恐怖シテ前夜不殘遁逃、一ト先御鎮靜ニ及ヒ日ナラスシテ官軍過半仙臺表ヘ御引揚ニ相成、土地ハ伊達家ニ於テ御預リニ付、同所八幡社元社人幡倉滿江方ヘ滯在中、秀則ヲ始メ同志ノ者一同仙藩ト共ニ民政周旋罷在候処、同月十九日ニ至リ元柴橋詰メ河野俊八ナル者、御總督府ヨリ當郡司代格命セラル、ニ依リ、同人エ民政局引渡仙臺藩一同引揚ニ相成、秀則エ早速仙臺御本陣ヘ參向會討ノ手筈可致旨御沙汰ニ付、有志ノ者一統發程ノ用意ニ取掛リ、尤公村儀ハ老母一人幼童三人アリ、深ク之ヲ憫ミ更ニ之ヲ秀則カ宅ニ遷シテ厚ク扶養ノ事ヲ托シ、秀則及公村ヲ始メ一同發程ノ途中、陣ヶ峰ニ於テ不圖再度亂入之庄兵ニ逢フ否ヤ、彼レ多勢ヲ以テ取圍ミ、兩人其外農兵二人ヲ擒ト爲シ、其夜ハ慈恩寺村陣中エ擊カル、公村歎曰、我不幸ニシテ大義ヲ果サス今賊ノ爲ニ死ナン、恨ムラクハ一擊戰モセサラントヲト、言終テ他言ナシ、翌二十七日白岩村陣所ヘ轉轉セラレ、同日陣ヶ峰橋南ニ於テ庄兵隊長堀平太夫外記ヲ斬首シ、藏人見テ忿怒ニ不堪、平太夫エ向ヒ屢々義論ニ及ヒ死ヲ肯セス、暴卒手銃ヲ把テ擊碎セラレ半死

トナル、遂ニ兵士之ヲ斬ル、直ニ天童ニ亂入同所放火、後柴橋陣屋掠奪在留外記藏人家族ハ勿論、同志ノ者ニ至迄搜索嚴重ニ相成候ニ付テハ、秀則家族并藏人長男熊雄其他民政周旋罷在候、同志ノ者共一同仙臺表エ立越、老母并幼兒兩人ハ大谷村ニ潜伏、尤死體ハ同月廿九日親族并同村曹洞宗永林寺示談之上庄内藩エ乞請、兩人死體ハ大谷村エ引取同寺境内ヘ假埋仕、藏人母并子息三人共、去ル明治五年ニ至リ私方ヘ引取今ニ扶助罷在候、右之通ニ御座候以上、

第三大區四小區東根村居住、

故三浦藏人從弟、

明治七年五月、 祠官、 三浦 千秋、

山形縣權令關口隆吉殿、

〔宣命寫〕

故白田外記少輔、

故三浦藏人、

汝等曩ニ兇賊鷓張ノ際ニ當リ、命ヲ大義ノ爲ニ致シ、或ハ屍ヲ亂軍ノ中ニ慕ス、朕今東巡ノ次殊ニ追悼ニ堪ヘス、仍テ縣官ヲシテ汝等ノ墓ヲ吊シ、聊カ金幣ヲ與フ、

明治九年六月二十六日、

〔採訪史料〕

辰四月廿六日白田外記仙臺へ出發從卒人名、

菅井 大八、高橋又五郎、菊池作兵衛、森半左衛門、
鈴木 清八、志藤宇之吉、白田 運七、白田惣五郎、

内菅井大八高橋又五郎兩名庄内勢ニ捕縛セラレ翌廿七日白田外記所分ノ後放還セラレ、
歸村ノ後領主山野邊役所ニ引立ラレ投獄村山郡平定ノ上放免セラレタリ。

同年同月同日、山形藩家老水野三郎右衛門兵ヲ率テ、將ニ新庄ニ參陣セントシ天童二次舍
ス、會マ酒井氏ノ兵白岩ニ到リ、將ニ天童ニ殺到セントスルコトヲ聞キ、轉シテ長町村ニ
退營ス。

〔水野家乘〕

同廿六日、御馬廻一小隊、御先手二小隊、大砲二門砲手共、其他諸吏員ヲ引率出張ス、同夜天童
宿營ノ処、莊内ノ兵隊俄ニ六十里越ヨリ白岩村邊江操出シ、天童ヘ可相迫形情ノ旨、同藩ヨ
リ報知評判等ニヨリ、退テ御領分長町村ヘ轉營ス、同廿七日單身參殿シ議ヲ決シ、直ニ長町
村ヘ出張、同廿八日薩長藩士等ト軍議ノ上、御領分達磨寺村ヘ轉陣、本營ハ原田與總隊ヲ分チ
隊長大久保傳平ニ屬シ、御領分長崎村ノ内落合ニ屯ス。

同年同月二十七日、澤宣嘉新庄ニ在リ、酒井忠篤軍ヲ村山郡ニ出セリト聞キ、吉田大八ニ
命シ旋リテ之ヲ防禦セシム、戸澤正實金壹万兩ヲ將士ニ頒與ス、此日酒井氏ノ兵柴橋ヲ占
領シ、明日新庄領北口陣屋ヲ燒夷ス。

〔萬覺留〕

四月廿七日、

一此度以思召御手料金一万兩被成下候、右御禮御月番御家老江相勤、小子(右衛門助)三拾兩
貳步頂戴之。

一最上邊物騒敷ニ付、當地江出張之吉田大八、今朝六拾里越之方江罷越候様、參謀方より被申
付候。

〔齋藤氏記錄〕

幸便ニ付申上候着々先月廿七日柴橋江押寄、御代官江掛合十分請取申候、翌廿八日松橋村
澤畑ノ四郎兵衛江押寄、忤召捕申候処武器不殘指上、何様之勤被仰付候共、少も無異義相勤
可申上候、御免被下度趣申聞候付、左候ハ、勤功有之候ハ、免し可申旨申付、武器請取申候
五十人分有之、夫ハ新庄領谷地之内、北口與申處江押寄陣屋江參候處、人數遁去ニ付火をか
け申候、村々役前之者寒河江江呼出し申候而、今度之戰之趣意爲申聞候、地所請取可申旨申
候處、皆々畏り左候ハ、村方之もの共不殘江所存承り候而、明日中可申聞旨申達候處、昨日
罷出何を差別心無之旨申出候間、當收納幾分宥し可申聞、猶重々申諭し八千三百石余先ッ
請取可申旨爲申聞候、追而新庄様江御掛合可申聞之旨申達候、然ル所一昨日大雨七ツ時ハ
霽候處、天童ハ人數指出船ニ而渡リ候趣ニ付、直様人數指出候處、逃去候間向押船五艘取候
而引揚申候、昨日未明天童勢押寄候付、直ニ人數指出候處、彼ハ大砲打出候付、此方ハ最上川
隔候而陣取打合申候、省藏能武者壹人打取候由、寅吉も壹人打取外、貳人打取候様相聞候、此
方輩人數貳百人斗ニ而、初而之利運大慶仕候、早々以上。

閏月朔日、

治郎兵衛
省 藏

又 藏様
小太郎様

〔萬覺留〕

四月廿八日、

一六拾里越ニ而庄内之人數罷越、北口本陣燒拂候段早注進有之。

同年同月二十九日、館林藩隊長妹尾友之進、兵三十人ヲ率ヘテ藏増河岸ヲ拒守シ、最上川ヲ隔テ、庄内軍ト砲戰ヲ交ユ。

〔漆山問答〕

官軍ヨリ出兵催促。

明治元年四月二十九日、新庄藩陣ノ奥羽鎮撫使澤島ノ城中ヨリ、薩州藩士篠崎藤次郎、長州藩士桂太郎、漆山ヘ來リ出兵ヲ促ス。此レ庄内ノ賊徒最上川對岸ヘ來リ聚ルヲ以テ同所拒守ノ爲メナリ。

藏増河岸出兵。

同年四月二十九日、晡時、官軍ノ募リニ應シテ、卒カニ兵ヲ藏増河岸ニ出ス、其勢凡ソ三十人隊長ヨリ、隊長妹尾友之進之ヲ率ユ、而シテ兵器ハ野戰砲一門、小銃和洋二挺可カリナリ。

藏増河岸ノ拒守。

四月二十九日、薄暮、我漆山兵進シテ藏増村ニ至ル、官軍篠崎藤次郎ノ指揮ニ從ヒ、兵ヲ分テ二隊トナシ、一ハ藏増河岸ヲ守リ、一ハ天童藩ト合シ下流藏増河原ヨリ大凡廿餘町ヲ距ルノ岸頭ヲ守ル、此日連雨新ニ霽レ、河流水大ニ漲ル、且ツ日會々暮レ、夜色暗黒、賊勢ノ多寡ヲ探ルニ由ナシ、只篝火數點水ヲ隔テ所々ニ明滅スルヲ見ルノミ、我兵試ミニ野戰砲ヲ操テ之ヲ發スルコト三四、賊應ズルモノナシ。

對岸ノ賊ト砲聲ヲ開ク。

同夜藏増村名主ノ家河岸ヲ距テ十町許ヲ以テ我カ本陣トナシ、翌日拂曉、我兵土苞ヲ積テ以テ壘壁ニ化ヘ、十人或ハ七八人ヲ出シ交番々兵セシム、此對岸ニ賊徒數名出沒時々發砲スルヲ以テ、我兵之ニ應シテ砲戰ス、是ヨリ閏四月三日ニ至ル迄日夜互ニ對守セリ。

同年閏四月三日、酒井兵部白岩ニ、酒井吉之丞谷地ニ在陣ス、天童城主織田氏軍ヲ出シ、將ニ谷地ニ進撃セントス、吉之丞使ヲ兵部ニ遣ハシ、遂ニ逆襲ノ事ヲ決シ陣容ヲ整フ。

〔採訪史料〕

- 一 左澤ヨリ船ニテ下リ長崎ヨリ上陸、次郎兵衛村中藤助石原平太夫（編）
- 一 天童向島渡リ、純藏（服部）新三郎（土屋）前三人ニ次テ渡ルベシ。
- 一 仁田ノ渡リヨリ中村省造ノ農兵正助。
- 一 野田ヨリ七郎右衛門（村中）半隊、市郎右衛門（野信）

- 一 溝延ヨリ金藏(高橋)祐吉(林平)文右衛門(坂宮)
 - 一 谷地ヨリ吉之丞本陣。
 - 一 寒河江ヨリ兵部本陣藤彌一小隊。
 - 一 藏増ヨリ七郎右衛門カ半隊。
- 右之手配ニテ天童エ可打入事。

同年同月四日、曉明酒井忠篤ノ將酒井兵部、兵ヲ進メテ天童城ヲ猛撃ス、天童藩士吉田大八諸軍ヲ督シテ克ク防クト雖モ、衆寡敵セス遂ニ敗走ス、城陥リ市街灰燼ニ歸ス、水野氏ノ兵山形ニ、秋元氏ノ兵漆山ニ、松前氏ノ兵東根ニ退ク、乃チ忠篤之ヲ聞キ侍臣ヲ遣ハシ収メテ寒河江柴橋ヲ守備セシム。

〔天童古事記〕

同月廿八日ノ夜ヨリ、城山内字三本松ニテ、敵兵驚カシ爲ニ篝火ヲタク、市中ハ益ノ如ク家毎ニ挑灯ヲ表ニ出ス、町廻リ嚴重ナリ、同壬四月二日最上川舟路往來ヲ立切ンカ爲ニ、川舟廿三艘山川竹四郎一手ノ勢ヲ以テ、窪野目河岸ヘ引付舟路ヲ斷ツ、天童藩河岸通リヘ堅メ居リシ處、同四日寺津河岸通リニテ火ノ手上リ、ツ、イテ野田口火手相見ヘ、賊兵鐵砲烈敷打掛諸口難支、此時賊徒何レヨリ渡リシヤ、忽チ賊兵顯レ出、味方ハ小勢此時大箭砲二挺、野田口仁田口ニテ賊兵ニ奪取レ無據引上候處、豈計ンヤ同日四ツ時矢野目村ニ潜伏致居庄内勢、中村治郎兵衛隊長ニテ、博徒共一千余人、小關街道矢野目街道字八反道三方ヨリ押

寄來リ、此時天童六日町若者共得物ヲ持チ守護仕ル處、鐵砲打合ニシテ不叶シテ遁退ク、北ノ方土手ヨリ打破ラレ、御殿ハ不及申ニ御家中不殘放火致サレ、ツ、イテ賊庄内勢町方江押入所々ヲ放火、田町始リニテ一日町竹下治良吉迄、寺ハ雨寶山多門寺天童山善行寺歸敬山三寶寺不殘燒亡ス、此時追手先キ邊ニテ、青丈砲車附賊共分捕シテ持行、後日庄内ヘ同盟セシ跡ニテ、火箭砲二挺ハ返ル、青丈砲ハ返ラス、老野森ハ小關街道ヨリ庄内勢押寄來ルヲ、吉田大八安藤貢原大之進武田新藏等、飴屋居宅ヘ忍居鐵砲打掛候處、庄内勢スハ伏兵アリト放火致、此時吉田大八矢立ノ筆ニテ、

隠れても螢光るや草の葉に

トチリ紙ニ書ク、安藤貢原大之進三騎群ル敵ヘ切テ入、敵將三騎ヲ鎚ニテ突殺シ、數十人ニ手ヲ負セ、日ノ丸ノ旗ヲ奪取テ、高橋川ノ河上ヲ登リ落行ケリ。

〔諸説聞書〕

松浦氏所藏

諸藩御固塙左ニ。

長崎者山形勢百人位、藏増者漆山天童窪野目者天童勢、大八殿其外本武の兵卒百人餘、外ニ漆山田井村固め天童勢少々、漆山三拾人位、野田村固南部様御人數拾人位、天童勢付添貳參拾人位、其嚴敷事筆紙ニ盡しかた、大筒小筒の砲聲相やみ不申、近郷近在人足ハ皆命掛、家財ハ遠方ヘ持運、いやはや迷惑極り候、兵糧として窪の目ニ而、たき出しの分五百人位と被仰付候、廿九日當村一日丈五百人分たき出し仕候、廿九日澤殿御付參謀様天童御付直ニ窪の目ニ參リ、其日も少々鐵砲せり合御座候得共、是又別議無之暮れ候、廿八日せり合ニテ敵

方四五人もけか仕候由、閏四月朔日も晝夜の分、當村ニ而貳百人分差出し申候、二日羽入當村ニ而たき出し、三日窪の目ニ而、四日朝の當村ニ而、然る處二日三日者、天童ニて少し油斷の様ニ相見候故、四日早朝の砲聲相聞候故、遠近と心を配り居候處、長崎の野田邊迄、明松鯨波の聲夥敷則、天童へ押寄へく相見候、其内寺津固め山形様大ニ敗北、敵直様天童の方へ向ひ候よし注進、五ッ比ニ至ります、砲聲はけしく、野田口も相敗れ、其敵高關田井固めの裏切ニ相成候故、諸手一同ニ敗軍五ッ半比仁田固めやふれ、陣小屋宇藏宅ニ火をかけ、高野窪の目天童三ヶ所同時ニもひ上り、黒煙天をありし、窪の目廿七間、尤寺院共ニ、高野十四間の由、誠ニ砲發の聲烈敷防様なく、焼失仕候、老若なきささけび、窪の目ニ而、大砲打かけ、明松ニ而、與平宅の火を懸候由、前代未聞の事ニ候、直様當村ニ押寄へき様ニ相見候間、村中不殘家財を遠畑持運ひ、土藏の目ぬり、只々懸火の用心仕候而、村東ニ遁居候處、當村者元々焼氣ニ無之、案内のミニ而、事濟申候、云かし喜右衛門遠浦の小屋壹ッ、是ハ是非燒不申候而、不濟故由、申聞、是計り焼失仕候、兵糧送分貳百人分、其内貳三拾人當村の成羽ニ押通申候、四五人私宅ニ參り、大八を隠し置候由、推察仕、土藏の勿論押込ニ天しやうを家さりし、鎗の石突に而、打おとし、品物數多盗出し、何事なく退去仕候、大町ニ而、晝飯の人数三百人、谷地海道通行、銘々甲冑拔身の鎗日の丸の旗ニ誠ニゑらひ事ニ候、扱又天童ニ而、寺津の相越候人数四百五人、御城を十重二十重ニ取圍ミ、直ニ發砲セリ、合大血戰御座候、庄内勢大ニいささゑい、聲ニ而、押寄候次第、砲聲とけしく、さりんニある、矢野政之丞大ひニ怒リ、尤御城留守居たりし、敵の中ニ馳入三拾程の相手ニ成、さんく切まくり、五、六人打殺拾人ニ手負せ

申候、跡ニ續く勢なき故、遁去申候、五ヶ町若もの番ニ而、大人数ニ候へとも、皆々遁申候、此日如何なる日ニや、高關邊ニ而、大筒の口火いりよもつき不申由、御城ニ而も石火矢貳挺しかけ候へ共、是又敵方へ打れず、只四方へとね候由、おしへりな矢野大八外拾人も御座候、落城不仕由、人々申聞候、彌庄内賊徒さかんニ成、つへニ御城ニ火をかけ申候、其外市中不殘田町三日町五日町中町一日町少々やけ申候、爰ニ吉田大八様窪の目固メあやうく成候間、天童ニ馳付候處、庄内勢所々へ火を懸居候故、俄ニ高橋の砲發し、大戦ひ、三人打殺し、何國となく遁去候由、此以□□老の森過半焼拂れ申候、御殿の勿論諸家中、市中一時ニ燃上り、諸士女中共四方八方へ遁候付、十方ニ暮ふせき様もなく、只身構ひ計りニ候、七ッ半頃、漸く火鎮り申候、其夜何事なく、打過候、庄内勢千二三百人程、新庄へ參由、楯岡長瀨へ泊り、翌五日長瀨の野田口渡船仕、谷地ニ參り候由、尤官軍新庄を引返し、尾花澤邊多分屯のよし、依之、向ひ郷ニ引取申候、五日天童ニ見舞ニ參り候處、いやとや目の付様なく、段々様子承り候處、御寶藏杯と大切成もの皆盗取、夫々火懸候由、七日暮五ッ比、御寺山形を歸寺、依之、様子承り候處、今日藝州様御人数三百人餘、御差出、本山龍門寺ニ者百人餘、御泊り、水野家本城の明渡し候も同様、諸士不殘門番不致様ニ候由、其内五拾人位、長崎邊迄出張仕候、動靜ニより仙臺の三千人御繰出之段、申達候趣、被仰聞、一先安堵仕候、其夜ハ庄内賊徒長岡ニ而、大戦ひに、かゝり火をたき、夜頃明松ニ而、長崎方へ押寄る様子ニ相見せ申候、不日追拂ニ相成候段、人々申聞、八日山形外薩長の官軍新庄を發向、七日夜楯岡泊り、凡百人位、八日朝長瀨へ參り、一手ハ宮崎ニ別れ、相圖の一聲上と否や、兩勢いさミ進、長瀨の御城焼拂申候、其刻四ッ時分、直様其勢天

童へ御着、尤御本丸焼跡ニ仮小屋をかけ、先市中の様子御家中不殘被爲御覽、官軍の佛向寺
より御腰休山形勢のさかやへ泊り篤と吟味の處、天童の落人吉田大八様始として、追々參向
委細聞届暫時休居候處、四日天童火事最中ニ、矢野目の人夫初藏打破了多分盗出し候様
申もの有之、段々様子聞居候處、全ク庄内勢を貫ひ受候由、諸藩大ニ怒り、八ツ時先名主仁右
衛門召捕焼拂可申様御參謀様被仰付、尤砲發不致様之仰、是の人民多くけか致し候而、不
宜間、拔身ニ而取締可申様の仰、依之仁右衛門宅を火をかけ、同人諸道具不殘焼拂之由、凡四
拾間程焼失仁右衛門遁去、翌朝同村金右衛門被召捕候由、其夜官軍總勢慈恩寺ニ押寄候段
申もの之、是と八日の夜大町通行、尤明松がんどふニ而三はだ通候由、爰ニ官軍の咄しニ
の、先達而庄内鶴ヶ岡落城焼拂候由風聞、五日葉山月山の間に、黒煙大ひよあらはれ是則落
城の印ニ候由被申聞候。

〔萬覺留〕

閏四月四日、

一天童城并城下庄内之人數ニ而焼拂候由、右ニ付薩長之御人數、今晚尾花澤迄出陣。

一八ツ時過左之通、參謀方より申來。

軍事掛、參謀局。

別紙之通早々上ノ山迄、布告可有之候也。

閏四月四日、

今般官軍出兵ニ付、武器兵糧等驛送之儀、夫々國役之事候間、御法之賃錢拂候而、繼立候様可

相心得候、此節柄第一人民之疲弊相厭候儀、別而肝要之事候、心得違有之間敷候、此段早々申
渡候事。

辰閏四月四日、

副總督府印

新庄より上野山道、

役人中、

右ニ付添翰致し舟形迄即坐差出。

參謀方より別紙御書付一通被相渡、早々布告候様との事ニ候條、得其意順達可有之候以上。

戸澤中務大輔内。

閏四月四日、

中村 善作、

竹村 直記、

舟形より上野山迄、

宿々本陣問屋中、

織田富久之助家來、

重野謙次郎、

長井 廣記、

松本 一學、

右天童ニ而戰爭有之由ニ而、出兵之儀内々御頼申込ニ付、參謀方江取合候處、諸事參謀方ニ
而指揮。

〔水野家乘〕

閏四月四日朝莊内ノ兵隊、本營へ襲來挑戰ニ付應戰シ、暫時ニシテ隊伍ヲ引揚ケ、御領分内表村ニテ隊ヲ纏メ、午時頃歸着ス、即日御勝手御取締相心得候様被仰出、同五日昨日來一時休戰スレモ、莊兵ノ舉動不容易景況ニ付、御城内外戒備ヲ嚴ニシ、御家中家族等近郷へ立退ヘキ旨達アリ、依テ家族上下共、堀田相摸守御領分小立村名主良次郎宅へ立退、同十四日迄寓居ス、尤元宣ハ晝夜殿中ニ相詰留守宅ハ二三ノ家來共ヲシテ守ラシム。

〔漆山問答〕

賊兵我陣後ヲ遮ル。

閏四月三日、半夜對岸ノ炬火俄カニ數ヲ加ヘ敵常ニ異ナルヲ以テ、盡ク我本陣ノ兵ヲ河岸ニ出シテ拒キ戰ヒ、翌四日未明間謀ヲ遣シ敵情ヲ探ラシム、須叟クシテ謀者還リ報シテ曰ク、上流ヲ守ル山形藩ノ陣我陣ヨリ大凡廿町ヲ距及其上流ニ在ル柏倉在倉藩ノ陣悉ク破レ、賊己ニ流ヲ乱テ直チニ我陣ニ向ヒ來ルト、言未タ終ラザルニ一隊ノ賊己ニ我ガ陣後ヲ遮斷シ、急ニ小銃ヲ亂射ス、我兵拒戰支ヘズ卒ヒニ大敗シ、我大砲隊長梶塚勇之進、及ヒ郷夫二名銃丸ニ中テ死シ、大砲隊付屬小澤鋒次郎銃創ヲ負フ、此敗ヤ大砲一門彈藥若干ヲ水ニ投シテ去リ、後チ敵ニ獲ラル、又我カ敗走セシ兵ハ藏増村民家ニ、或ハ田間ニ潜匿シ日暮ニ至ル比口ニ、悉ク漆山ニ飯リ來リタリ。

御陣屋ノ婦女老幼賊兵ヲ避ク。

同朝我漆山勢ノ潰走スルヤ、對岸ノ賊盡ク川ヲ渡リ直ニ天童ニ向ヒ、火ヲ城下ニ放テ急ニ之ヲ攻メ、一舉シテ其城ヲ拔ク、此時ニ方リテヤ、我カ漆山モ亦必ス賊ノ襲撃ニカ、ルヲ料リ、急ニ婦女老幼ヲ東山村龍見寺へ避ケ去ラシメ、壯年ノ男子殘テ御陣屋ヲ守護セリ、己ニシテ賊襲來セズ、天童ヨリ直ニ寒河江芝橋ノ地方へ退キタリ、此日天童藩主ハ奔テ仙臺ニ投セシモ、仙臺藩之ヲ納レザリシト云フ。

〔酒井世紀〕

同年壬四月二日、天童山形諸藩ノ兵等、火を民家に放て戰を挑む、翌三日酒井兵部進撃の令を諸隊ニ下し、明れハ四日最上川を渡りて砲戰し、勝に乗して天童の城を攻拔きぬ、先に股野市郎右衛門等諸士の青年輩を致道館に集め、當家既に嫌疑の地に陥れり、首鼠兩端の計を取らんより、寧ろ意を決して義旗を揚げ、先づ最上の地を略し、沿道の諸藩を従へて江戸の城を克復し、薩長と中原に雌雄を決するに若かすと唱へ、雷同する者多かりけるに、重臣等當家の方針に背戾する旨を以て、説諭を加へ事漸く鎮靜せしり、是時市郎右衛門ハ兵部加部下ニ在りて、尙又己か議論を主張し兵部を要せしかハ、兵部内外の勢に迫り、止を得ずして進撃の令を下したる者なり、公此報を聞き大に驚き、直に侍臣を遣はして兵を進むるハ寒河江柴橋等を警衛せんか爲なり、敢て隣藩を侵し地を略せんとハ非ず、速に引退て國境を守るへし、違背する者有るに於てハ、直に永の暇を取らすへしと令せられければ、諸隊ハ遂ニ引揚けり。

〔見聞録〕

同日閏四月庄内勢川西固の内大久保より一番舟渡、夫より長崎固め始め一同川を越へ、野

田にて小屋貳ヶ所にて二軒、藏増村方にて右焼立、合圖として天童へ乱入陣屋は不殘町方下は老の森より、上は一日町迄不殘焼失ニ相成此戦争にて天童大敗走す、天童勢の内討死之分。

野村又右衛門、寺澤祐之進、尾形軍吉、新岡ニテ死ス北村敬作、北村玄吉、北村小次郎、野村友造、結城民藏。

同年同月同日、朝廷東山道總督ヲシテ、館林領主秋元禮朝ノ勤王ヲ賞シ、菊章ノ御旗ヲ下賜セシム。

〔館林領書留帳〕

覺。

東山道御總督様より上意之趣左之通。

秋元家ニ者先達而中より勤王實効相顯、叡威不斜被思食候、依之格別之廉ヲ以御旗賜候、猶此上君臣一和一躰せしめ、爲皇國抽忠誠可令盡力旨御直ニ被仰渡之、別紙之通厚御沙汰之上、菊御紋御旗被遊御拜領候事。

閏四月五日。

〔秋元家譜〕

明治元年正月京師戰起ル、黒土陣屋ヨリ役夫ヲ京師ニ出タシ、糧運ノ仕役ニ供ス、三月三日召ニ應シ、江戸ヨリ山道ヲ歷テ京師ニ登ラントシ、倉ヶ野驛ニ至ル、東山道總督ノ東下ニ逢フ、總督上京ノ遲緩ヲ詰責シ、館林ニ歸リ謹慎命ヲ待タシム、老臣齊田源藏明善ヲシテ之ヲ

分疏セシム、十五日大砲貳門金貳萬兩ヲ獻ス、總督其罪ヲ免シ砲手ヲ徵ス、尋キ舉藩出兵ス、四月四日菊章ノ御旗ヲ賜フ。

同年同月六日、米澤城主上杉齊憲、酒井氏ノ兵天童ヲ攻陷シ、將ニ山形上山諸城ヲ進攻セントスルコトヲ聞キ、高山與太郎松本誠藏ヲ遣ハシ、私闘ヲ中止セシム。

〔木滑要人日記〕

閏四月六日晴。

一關宿逗留片山カ來書、庄内大舉天童を焼打ニ致し落城ニ相成、右勢ニ乘し山形上ノ山江相迫候云々注進有之、私戰ハ爲相止候方、己ニ仙藩との打合も有之候間、上ノ山カ庄内迄、右説得の爲め高山與太郎松本誠三を被遣。

同年同月八日、鎮撫總督府命ヲ上杉齊憲ニ傳へ、兵ヲ出シテ天童ニ應援セシム、同日吉田大八薩長諸兵ト横山ヲ襲ヒ長瀨ヲ燒夷ス。

〔御年譜〕

上杉中將。

今般庄内賊兵天童へ暴動之報知有之、彼地の形勢切迫ニ付、右應援兵急速差出し、速ニ賊徒討拂可申事。

但討會先鋒ニハ候得共、彼地へ出兵未タ無之様子ニ付、右人數を分て天童へ可差出、猶出張之時刻等早々可申出事。

辰閏四月。

鎮撫總督、朱印

〔天童古事記〕

同年壬四月八日、筑州勢三百人餘來ル、佛向寺宿陣、同日新庄ヨリ薩長、并吉田大八橋岡泊リ、ニテ長藩へ押寄陣屋を襲焼ク、領主米津伊勢守庄内親族故ナリ。

〔長瀨郷土史〕

明治元年閏四月四日、天童藩士吉田大八我虛ヲ襲ヒ城ヲ燒キテ去ル、是ヨリ先キ、慶應三年二月鳥羽伏見ノ戦争起ルヤ、積年鬱蓄セル過機一時ニ爆發シ、天下勤王佐幕ノ二黨ニ分レ紛々擾々寧日ナシ、初メ當地各藩相同盟シテ幕府ヲ佐ケシモ、幾クモナク分離シテ山形天童新庄等勤王ス、我藩庄内ト累代ノ姻戚タルヲ以テ深ク相結托セシモ、庄内新庄ヲ陥ル、時我援兵ヲ出セリ、家老人見覺右衛門等上ニアリテ諍々大義ヲ説キ、處士寒河江吉次及同佐内等野ニアリテ閭々名分ノ誤ルベカラザルコトヲ論セリ、是ニ於テ君侯江戸ニアリテ先ツ官軍ニ屬シ、代官根本策馬亦天童藩士吉田大八等ト相往來シ庄内獨リ孤立トナレリ然レモ庄内ハ國富ミ兵強ク連戰連勝勢破竹ノ如ク、既ニ新庄ヲ燒キ山形ヲ陥レ尋テ閏四月四日庄藩ノ將酒井兵部等兵ヲ率井テ天童ヲ攻メ城ヲ火ク、藩主織田老侯家臣吉田大八等僅カニ身ヲ以テ遁ル、庄内勢既ニ天童ヲ火ク、傍近亦敵手ナシ、意氣昂然凱歌ヲ奏シツ、歸リ長瀨城ニ宿ス、吉田大八之ヲ聞キ憤怨シテ以爲ク、疇昔ノ舉彼等我ヲ怠ラシムルノミト、庄内勢既ニ去ルヲ窺ヒ兵ヲ率井テ來リ襲フ、時ニ老侯先キニ庄内ニ在リ、君侯及重臣等江戸ニ在ルヲ以テ當城ヲ守ルモノハ根本策馬アルノミ、策馬大八來ルト聞キ衆寡敵セザルヲ察シ先ツ去ル、時ニ門卒清野尹四郎ナルモノアリ、文武ノ才幹ナシト雖頗ル氣節アリ、慨然トシテ獨リ門ヲ守ル、大八等既ニ堀ニ迫リ將ニ門ニ入ラントシ、尹四郎ヲシテ導カシム、尹四郎其意ニ從ヒ城中ヲ案内シ後虛ニ乗ジテ逃レ去ル、大八火ヲ牙城ニ放ツ炎焰天ヲ燒ク、延テ各長屋ニ及ブ、村民大ニ愕キ相言テ曰ク、事茲ニ至ル我等亦免ル、能ハザラント、各財貨ヲ潛メ肅然トシテ形勢ヲ窺フ、大八牙城ヲ燒キ意未タ滿タズ將ニ倉廩ニ及バントス、會村民寒河江佐内等三人大八ヲ見テ説テ曰ク、貴藩ト本藩トノ確執余輩草野ノ小人固ヨリ與リ知ルヲ得ズ、城塞ヲ火ク敢テ容喙セズト雖、抑此倉廩ハ村民ノ共有物ニシテ、本村數千ノ生靈依テ生命ヲ維持スルモノ、若シ之ヲ失ハハ村民立ロニ活路ヲ失セン、伏シテ寛仁ノ處置ヲ仰グト、大八首肯シ倉廩事ナキヲ得タリ。

同年同月同日、酒井氏ノ軍退テ、大綱田麥水澤海味諸村ニ屯營ス、明日官軍寒河江ニ入り人民ヲ安堵シ、賊徒ノ潛居スル者ヲ按檢ス、此日酒井兵部鶴岡ニ歸陣ス、酒井忠篤手書ヲ酒井吉之丞ニ與ヘ志津ニ陣シ、最上河口ノ守備ヲ嚴ニセシム。

〔西村山郡史〕

今度 朝廷之御仁厚より、萬民安堵之爲、奥羽江鎮撫使御出馬ニ相成候処、庄内等之賊徒所々乱妨いたし、且惡業相働候段、相聞江則官軍被差向候ニ付、若賊徒潛居候ハ、早々可訴出候、厚恩賞可被宛行候、萬々一隱置候者於有之ハ、屹度可致沙汰候、聊たりとも心得無之様廣く萬民江可申達事。

閏四月九日、

官軍先鋒長州參謀使、

金子 文之丞。

中村 小二郎。

〔戊辰庄内戦争録〕

同九日、文右衛門祐吉正助ヲ具シ、兵部鶴城ニ歸ル。藤助新三郎志津ニ退キ、其餘ノ諸隊本導寺ニ引キ、番兵ノ手配ヲ殿ニス。

吉之丞江。

此間申達候通、川手前志津邊ニ引上最上押江の儀、其許全隊計ニテハ、人數不足之趣ニ付、爲應援服部純藏并物頭持筒組の内二組、兵部隊より相殘し候間、諸事申談當節大切之場合ニ付、一同憤發可致盡力旨、此段一同へも可申達事。

閏四月九日。

同年同月十一日、上杉齊憲伊達慶邦ト白石城ニ會見シ、松平容保謝罪嘆願ノ事ヲ議ス、奥羽列藩重臣等亦之ヲ議定ス。

〔木滑要人日記〕

一 八半時御着ニ付、大夫ハ御座敷入口ニ而御出迎、我々片山ハ門外ニ而御出迎相勤、御先詰之御役人同斷、大夫被召御召出御用向被御閉上候ニ付、我々兩人御供之中里ト一同被召出、御懇之御意被成下、九條殿下江之被仰立條、仙臺侯江之御話振等、彼是御評判有之。

一 仙臺侯ニ而者、君上之御乗込を遅しと御待被爲在候ニ付、御着被爲在候ハ、早速白石城江御入被下度旨、御着前被仰込置候ニ付、御着直々御供揃被仰出、右城ニ被爲入君上御馬、兩大夫下條中庶子我等ハ徒ニ而御供仕ル、右ニ付御土産として、右之通被通候ニ付、右御使者

我等相勤候、尤御口上取繕ヒ、若生文十郎江申置。

一 白鞘、御刀。

伊達陸奥守様江、

一 鮮鯛一折、代金貳千疋。

一 兩侯御評席江、千竹兩大夫(竹股)も案内有之被罷出、自先方も坂但木真田喜平太も罷出、夫々御評判有之、畢而御酒被進、兩太夫江も御前御酒被成下、末段ニ下條中庶子我々も被召出候由ニ而、御側役安田竹之輔案内有之罷出候處、御二之間御敷居際江被召出、陸奥守御懇之御詞有之、御盃被成下、隨而右御席江罷出候面々進等有之、畢而相退御禮安田ニ相謁ス。
一 四時比御歸雨天ニ付、御駕籠御馳走ニ御貸被進。
一 奥羽列藩ハ廻檄ニ應し罷出候、面々今夕會合之方、仙臺重役ハ廻文差出之會集之方ニ付、前文君上御歸役直々案内有之、佐藤勇記白石片倉より宅に罷越テ、列藩追々相會候ニ付、御當家様の御重役ハ別席ニ案内有之、仙藩坂英力但木土佐石田正親、若年寄増田歴次出會内評之上、列藩佐之名籍之面々一同案内有之。

仙臺藩、

坂 英力、
但木 土佐、
石田 正親、
増田 歴次。

米澤藩
千坂太郎左衛門
竹股 美作
木滑 要人
中里 丹下
大瀧 新藏
片山 仁一郎
二本松藩
丹羽 一學
府中藩
三浦 平八郎
柳澤 正助
棚倉藩
平田 源右衛門
梅村 角兵衛
龜田藩
大原 伊藏
吉田 權藏

中村藩
相馬 勒負
佐藤 勘兵衛
志賀 次右衛門
山形藩
水野三郎右衛門
笹本 藤馬
福島藩
池田 權左衛門
高橋 小三郎
上山藩
渡邊五郎左衛門
増子 武兵衛
一關藩
佐藤 長太夫
森 文之助
八島藩
梶川 嘉藤太

盛岡藩、
野々村 眞澄、
江楮 五郎、
三春藩、
大浦 帶人、
小坪 廣人。

一右面々相揃候上、仙臺之但木今般會津家云々謝罪嘆訴之趣、仙米両藩江周旋頼入候ニ付、別紙之通鎮撫總督府江、兩侯相揃周旋ニ可被及被存候、依之御各藩御見込を相伺、御同意相揃候上、早速其運ニ相移候方ニ付、諸賢御存慮之程聊無御服藏、御相談被下度旨申述之、畢而左之通書付共、若生文十郎持出、上席之者ハ順々披見ニ入候事、隨而書中ニ不盡意一統江可及懇談処、多勢之儀ニ而一同ニ申開カセ候事六ヶ敷ニ付、仙ノ益田歴次若生文十郎、并我等大瀧右四人ニ而出座、四五藩ツ、請持懇談ニ相及候処、各何等存慮無之甚御老ニ拜承仕候ニ付、御書付江御連名奉願旨、異口同音ニ罷出候ニ付、左候ハ、別紙請書御名前相認候ニ付、御連署被下度、御兩藩大夫方ハ申談之淨書出候上、右書面大夫方の前江差出之、各藩重臣一人ツ、罷出花押相認之。

同年同月同日、酒井忠篤、白田吉郎辻庄一郎ヲ米澤ニ遣ハシ、嚮日清川應戰、天童攻撃ノ事、全ク王師ニ抗スルノ本意ニ非サル所以ヲ、總督府ニ分疎センコトヲ請ハシム。

〔酒井世紀〕

同月十一日、白井吉郎辻庄一郎兩人を、越後路より米澤へ遣はし、上京催促の朝命により出發準備中、突然清川を襲撃せられ、餘儀多く應戦したる事、并ニ天童藩戦を挑むか故ニ、國境警備の隊長等、一己の計ひにて天童を伐たる事、何れも王師に抗するの本意に非ざる由を、總督府に分疎せん事を請はしむ。

同年同月同日、酒井吉之丞等本道寺ニ陣ス、官軍入間沼山ヨリ進撃シ、賊軍横岫村ヲ燒ク。

〔西村山郡史〕

明治戊辰ノ役、庄内ノ兵本村ノ西北支村字横岫ニ陣營シ、官軍ハ寒河江川ヲ隔テ吉川村ニ宿陣シ、閏四月十一日入間村字森畑ニ進軍、朝辰ノ刻ヨリ發砲ヲ始ム、村民皆恐レ山谷ニ遁逃ス、晝後ニ至リ賊兵水澤字宿下ニ進ミ、頻ニ發砲セリ、之ガ爲ニ官兵撃タルモノ多ク敗走セリ、申ノ刻ニ及ビ双方戰ヲ收ム、然ルニ日暮ニ臨ミ官兵三百名餘、網取村ノ方ヨリ進撃シ、字山崎ニ來ル、此時賊軍上ノ平ニ引上、尋テ陣ヲ掃ヒ退却シ、官軍賊ノ營所ナル横岫ノ人家ヲ燒ク。

同年同月十六日、吉田大八天童藩陣亡者ヲ佛向寺ニ供養ス。

〔天童古事記〕

同十六日、天童藩戰死ノ者二七日退夜、佛向寺ニ於テ大旋餓鬼供養、旋主、吉田大八。同年同月十八日、副總督澤爲量、天童城下罹災者ニ金一千兩ヲ、織田信學毎戸ニ米五俵ヲ給與ス、其他義捐者頗ル多シ。

〔天童古事記〕

同月十八日、澤三位殿ヨリ天童類焼者江、金千兩被下置、一戸ニ付三圓五拾錢、織田家ヨリ一戸ニ付粗五俵。

同年同月二十三日、副總督澤爲量織田信敏ニ命シ、吉田大八ノ譴ヲ解カシム、是ヨリ前、信敏大八ヲ譴シテ謹慎ヲ命ス、故ニコノ命アリ、庄内藩檄ヲ發シ吉田大八ヲ百金ニ募ル。

〔堀尾重興日記〕

織田兵部大輔。

今般從召列候重臣之者、兩人急速申達候儀有之候間、明廿四日參陣申付候事。

新庄在陣。

副總督。

辰四月廿三日。

右之通申來候間何事ならんと罷出候由之処、吉田大八此節爲慎候由之処、何も朝廷ニ對し不調法無之ものニ付、相論し可申旨達し有之候由。

〔諸説聞書〕

檄文。

先般薩州長州之者共妄ニ帝闕ニ迫リ、暴威を以鎮撫使を唱導し、無謂干戈を動し、奥羽を騷擾せしめ候儀、其罪不輕候、就而天童吉田大八其他之奸賊共、薩長之虎威を假借し、百姓を苦しめ、寺社民屋を放火し、且資財を掠め、婦女を姦淫し、最上郡を騷しめ候罪、戻難許、仍而奥羽の侯伯と合從し、速ニ姦賊を剿滅し、万民塗炭の苦を救んと候、然上ハ已來生産を安し可申ハ勿論也、且當家人數出張之先々、專周旋致る候、猶罪魁士吉田大八生捕候ものへハ、

爲賞譽金百兩取らせ可遣候、并其外之者共生捕差出し候ハ、夫々賞譽可有之もの也。

庄内藩。

壬四月。

中村權太夫。

中田 良吉。

北瓜 楯六。

小林 幡助。

同年同月二十五日、織田信敏、去月二十九日以來ノ戰鬪狀況ヲ啓申ス。

〔天童古事記〕

去ル四月中旬、澤三位殿御縁込、兵部大輔在所羽州村山郡天童表江二夜御止宿、夫ヨリ同所戸澤中務大輔在所新庄表江御進發ニ相成、本藩先導使として吉田大八附屬の者、乍少人數引卒御先導仕、然る處同月廿六日浮浪の徒ニ候哉、凡ソ千人程庄内最上堺六十里越と申間道打越、押寄候旨寄々注進相達候ニ付、天童表より斥候差遣し探索致させ候處、故幕府領當時天領と相成候寒河江柴橋、其外慈恩寺と申大寺有之候處へ屯集罷在、且同所近邊博徒共語り合、都合三千計にて形勢不容易様子相見へ候旨注進ニ付、封堺防禦致度候得共、元より小家兵部大輔留守中也、且鎮撫使御先導、出兵後微力相極無覺束存候間、同國山形上ノ山米澤江援兵相頼候處、更ニ不應不得止事ヲ、仙臺表江頼候得共、是以同様無據鎮撫使先導使江、同月廿八日着到嚴命を以催促仕候處、漸々相應申候、依之左ノ通手分ニ相成申候。

最上川筋、但天童表ヨリ一里餘、西、故幕府領柴橋堺。

野田口、

松平志摩守人数、
東根陣屋人々。

土屋采女正人数、
北目陣屋人々。

田井口、

本藩人数。

溝延口、

同。

仁田口、

秋元但馬守人数。

寺津口、

水野真次郎人数。

左澤口、

同。

右之通同月廿九日分配仕、嚴重相堅メ居申候処、壬四月二日仁田口ニテ砲戦相始リ、其他口々ニテ打合少々砲戦仕、翌三日高關口大ニ砲戦、其他口々ニテ打合厚薄救應終日防戦仕、夜ニ入相止、翌四日未明ヨリ、高關口大ニ砲戦防禦仕、寺津口火ノ手舉リ、つゝいて野田口火の手相見ヘ候ニ付、諸口難支高關溝延田井共ニ、繰引ニ引揚候處、豈計らんや賊徒何れより渡リ候哉、陣屋四五丁外と故幕府領矢野目村と申處ヘ、前夜より潜伏致居、同村陣屋江襲い來リ候ニ付、居留りの者堀堀ニテ、爰を大事と必死防戦仕候得共、遂ニ被致放火、依之引揚の人数一騎掛走付、大ニ盡力接戦仕候得共、先後衆寡難敵、遂ニ敗走散乱仕、隠居左近將監仙臺ヘ一先開陣仕候、前夜賊徒忍込候ニ付、無疑心ニも無御座候得共、右等の鎮撫使御糺明も可有之候得共、推察之儀ハ不申候、手負打死ハ未タ不明ニ御座候得共、相知れ候丈ケ御届申候。討死檢使、海野彦吉、旗奉行、緒方直人、大砲方、結城民次郎、小銃組、北村小次郎。

持筒組、松本鼎三。同、

井上文藏。同、

野村半左衛門。

手負、鍵疵、黒澤男也。彈疵、新野琢助。同、

須原鋭太郎。

陣屋討死、佐藤瓶右衛門。北村源吉。北村金太夫。

其他討死手負可有之候、賊徒打取候分御座候得共、難戦の折柄打捨候間、數難申上候、追て巨細注進次第可申上候得共、依御尋飛脚の者口上相認奉入御覽候以上。

織田兵部大輔内、

明治元辰壬四月廿五日、

吉田 縫殿。

〔新聞日誌第三〕 慶應四辰年五月廿七日、

一去ル三日羽州天童織田家の軍勢溝延藏増邊迄出陣、庄内の軍勢ハ仁田原よて御臺といふ所ニ陣營して、最上川ををたて、發砲し、雙方川をわたすへき様子もなく打合候處、その夜いつれの處よりきたりしよや、庄内勢窪の目と申處へいて戦争はしまり、藏造の邊より溝延まで放火し、翌四日天童へ進軍、市中放火いたし候ニ付、出師せし織田方の勢、陣屋心許なく軍をまごめ引返し、防戦手いたく致といへど、衆寡敵しりたくとに勇敢の戦士よて、天童方困戦するといへども、終ニ敗北庄内りた破竹のとく進撃、陣屋内の家士自焼して落去、天童侯ハ關山越よて仙臺の方へ落行候よしの風説、山形よりも城外二里程とかれ候處へ出陣せしよ、勝をこりたる庄内勢會釋もあく砲發して、直ニ劔闘ニおよひ、其烈敷事たとへをとるよものあし、死傷双方よ有之、山形勢戦死人の名前、大久保屯、加藤政藏、赤星守人、前田勇次、おあじく庄助、稻半平、松崎竹次郎その外、淺手深手負有之よし、澤三位ハ新庄の城まで

御出陣ニ相成候よし。

同年同月二十八日、天童藩家老津田勘解由、長岡廣記仙臺ニ低リ、米澤藩ニ縁リ救援ヲ哀請ス、同日庄内藩酒井吉之丞天童ニ迫リ、同盟ニ加入セシム。

〔木滑要人日記〕

同廿八日晴。

一天童家老津田勘解由、長井廣記入來ニ付、片山面會之處、追々御承知被下候通り困難當惑之處、畢竟吉田大入り不取量、右之禍を取候儀ニ付、同人ハ在方ニおゐて慎を申付番人を附置、都合次第嚴刑を申付、御隣國江も御詫仕候心得ニ付、此上何と御助ケ被下度云々ニ而、是迄之一十委曲ニ申聞有之。

〔天童古事記〕

同月廿八日、庄内軍勢酒井吉之丞隊長ニテ、久野本常安寺江宿陣ニテ、織田家江使者を以同盟致ヤ否ヤ、若シ又不同意ニ於テハ一戰ニ及フト云、此時織田家ヨリ田口逸作、加藤定次郎常安寺へ出張シテ同盟約ヲナス、然ラハ直クニ出兵致セト云、依テ二十五人出兵トナツテ庄内へ出陣、間モナク庄内ヨリ織田ノ藩中江、鹽五十俵ノ手當有之。

同年同月二十九日、副總督澤爲量、奥羽列藩同盟討會討庄解兵ヲ、總督府ニ啓申セルヲ聞キ、討庄諸軍ヲ新庄ニ撤退セシメ、秋田ニ轉陣ス、庄内藩諸軍進テ古口ニ入ル、戸澤正實使ヲ遣ハシ解兵ヲ請ハシム。

〔萬覺留〕

閏月廿七日。

一八聖山詰之御人數今晚舟形へ一宿之處、今晚五ツ時過引揚ニ相成候。

閏廿八日。

一今夕八ツ時過、弘前御人數、龜田御人數、參謀方差圖ニ付、古口名木澤詰之分、新庄へ繰上ニ相成。

一今晚四ツ時過、伴野庄司(副總督)より呼出ニ付罷出候處、今晚寅之半刻御出門ニ而、三位様秋田之方へ御越被仰出、依テ軍事掛同役共へ案内手紙差上。

但御出門前重役出吳候様、庄司より沙汰有之、右ハ中村方より紀右衛門殿へ案内申上候。

閏月廿九日。

一今晚寅之半刻、三位様益御機嫌能遊御出門、薩長筑半隊ツ、津輕御人數不殘、此方様より物頭壹騎、足輕貳拾五人御供申上候、參謀方會計方も出立候。

但御跡より中村善作、舟生傳太夫、山崎頼母、吟味貳人、御醫師貳人、御茶道一人、坊主二人、御徒目付一人、其外小使致御供候。

一三位様今日及位村迄御越、三藩并弘前龜田之御人數ハ、中田村金山町江止宿之由あり。

一庄内勢板敷越、井川筋通より古口町迄押來候趣、四ツ時迄注進有之、角川村へも押來候由、是又注進有之、右ニ付古口邊迄斥候被仰付候間、直ニ支度致し早馬ニテ、升形通より津谷村先へ罷越、段々様子相見候處、庄内人數古口町ニ、四百五六十人程參居、柏谷澤村其外戸川村邊

ニ余程屯致居、此方様御人數ハ皿島村へ引揚居、詰合之面々より様子柄相尋候処、先方ニ而ハ餘程砲發致候由、此方ニ而ハ一切手向不致引揚候由申事ニ候。

一 庄内勢重役へ以手紙致面會度申込候処、先方挨拶ニ御相談之取計ハ今日ハ六ヶ敷明日松平甚三郎出陣致候事故、其節御出被下度段申來候、然ルニ猶豫可致場合ニも無之故、小林甚藏伴を以是非共御面會之上、申述度筋有之候段、又々申込先方より挨拶無之内、無理ニ門屋與惣兵衛同道ニ而、小子罷越塗中迄參候処、先方より手紙參候ニ付、不取敢開封致候処、只今罷越吳候趣之文面故、幸取急參り御重役之宿陣何方哉と相尋候処、小林甚藏宅之由ニ付、以亭主手紙差出無間も、庄内家中服部十郎右衛門朝比奈長十郎、石原友太夫と申仁へ、座敷ニ於りて致面談、此度仙臺白石城下ニ而、奥羽一統之重役衆之取計方并數百年御懇意、且豊山様へハ別段、殿様ニ御乗出以來より、御兩敬之御取結之筋委細申述、此度ハ不慮之儀ニ付、無據國境迄出兵之譯合申述、毛頭敵對可致筋無之趣、一々談判ニ及候処、挨拶向左之通、一 仙台白石城下ニ於りて、奥羽一統重役衆、太政官迄款願致吳候処ハ難有事ハ山々なれ共、解兵之儀ハ出陣先ニ而取計六ヶ敷、乍然中務大輔様之厚き御口上之次第ニ付、是より先江ハ出兵不致趣申聞候。

一 御尊藩并澤三位様、且長藩筑藩へ手向可致儀ハ毛頭無之、只々去月廿四日之薩藩乱暴之次第、如何ニも盜賊之仕業、薩賊等討留候心得ニ而、致出兵候趣申聞候。

一 奥羽一統之御重役衆、太政官迄御申立吳候御取計ハ、鶴岡城外迄御重役成御用人成を以被仰聞候へハ、解兵之儀ハ如何ニも手早く、御用辨ニ相成候趣申聞、右之外ニも種々談判先

方より挨拶、小子より申述候趣意ハ、口傳有之故略之、前條者大略記之。

同年同月同日、吉田大八密カニ山形ニ到リ、米澤ノ營ニ自訴ス、堀尾保助仙臺藩將某ト之ニ面シ、事情ヲ聽取ス、大八大義順逆ノ名分ヲ演シ、反正歸順ヲ説クコト切ナリ、遂ニ禁錮セラル、堀尾等衛兵ヲ付シ以テ其逸脱ヲ豫防ス。

〔吉田守隆略傳〕

山形賊の會議所に行く途中、沖の原にて賊の番兵に見咎められ、自稱して縛を受け引かれ、つゝ其の會議所に行き、米賊堀尾某に向つて大義順逆の名分を演べ、反正歸順の説を爲し、確然として其の暴威に屈せず、賊徒其の義氣の盛んなるを感じて、道に頓にも殺しかねて、則ち縛をとき、市家の内にぞ囚し置ける。

〔堀尾保助日記〕

同廿九日、

- 一 天童藩吉田大八、御國へ款願いさし度との事ニ付、仙藩立會聞取候儀左之通。
 - 一 四人吉田大八申出之趣、仙米山三藩列席聞書左之通。
 - 一 三月晦日、仙藩三好、伊藤長藩世良、天童吉田大八、四人列席。
- 世良ノ論、
- 柴橋へ庄内ハ人數百人程差出候、不届ニ付討入可申、右ハ仙藩筑前長案内ハ天童、大八辨解、
- 庄可討罪なし、徳川氏去年政權を

天朝へ歸し、當二月ニ相成扱替を致候者不宜ニ付、説得して人數引上ケ可然。世良論。

近領情實尤ニ候へ共、出兵人數己ニ申達難止候へ、夫の夫よして早々大八行き、柴橋の役人へ申聞、庄内之兵を爲引可申、直懸合の致ましきこの事。

但此方々不行天童へ呼申聞、一通にて説得の致まし、夫て不聞の打との趣意なり。

右之通よて大八出立之節、三好駕籠并蒲團も貸し、早追にて翌四月朔日天童着、即日柴橋手代を呼に遣し候處、村井友次入來柴橋陣や引上之儀、申達置儀有哉無哉と問ふ、庄内右陣屋を請取爲ニ、人數差出置候様相聞候處、人數之多少并

天朝よりの御達を拒ム爲ニ候哉、其邊を可申聞旨申談。

一天童之下役ニ陰之間へ、役人を呼立させ相拒ミ候而、奥羽の大乱ニ相成候間、此方々差圖ニの無之候へ共、庄内人數を引取らせ可申、仙臺々打手之人數も、明後日着ニ可相成と申談ス。

右之趣村井承知。

天朝之命并庄内之人數も、同役共へ申談し、請取を以答可申とて歸る。

但明朝請書差出との事ニ候へ共、夜も深更故明日晝迄ニ可致旨申談。

一仙臺薩長筑米四藩之人數、三日着之積ニ候處、一日運ひ二日八時頃迄天童へ着ニ相成。

但村井未請書持參無之。

一右ニ付斯様くニいさし候處、今村井不來旨吉田申述候處、參謀代ニ入來之長藩中村小

四郎始皆以不機嫌之模様、然るに村井入來ニ相成、兎角吉田さん惣而取量候事ニ付、宿陣ニ而評判いさし可然、我々罷在候而、不都合なりと申聞候間、扱て其夜も不尋如何之儀と存候へ共、宿陣之友次を連罷歸ん。

一村井之請書加除いさし、吳、長州隊長代粟屋市太郎本陣ニ居候間、受書ニ通進達いさし候處、委細承知一存ニ難決、三藩沙汰之上ニ可致、今晚の私預置と申聞候事。

一吉田宿陣ニ歸候、丑之刻頃酒を吞居候處、注進入來薩人出立との事、いつ方へ御立と問候處、過刻拾人計川端之方へ御立候處、拾人位の注進も不致候へ共、大勢故注進、尤長州人も立と申事ニ有之、何事ニ候哉と存、仙臺守屋英馬方へ以書狀尋越候處、返事無之使之者申ニ、書狀の御披見ニ候へ共、御返事なし、仕度を致せとの御差圖を聞候との事、依之地元之大八故不知儘も難相成、長州の本陣へ行隊長粟屋へ、いつを之譯にて御出兵と問ふ、答ニ自是柴橋へ討入との事、依之昨日村井を受書も出し、其文談中ニ庄内人數今日中ニ引揚候と申事も有之候ニ、いつを之難し候處、猶隊長申ニ、貴殿の探索の不行届、此方の探索の庄兵嚴重の守リニ有之故、人數差出候儀、貴殿の探索不行届ゆへ、御断なしニ出兵致まとの事ニ有之故、猶又申述候ニ、私之不行届の兎ニ角、私計ニ無之村井も不行届と申ものニ付、留置可申と申候へは、夫の御勝手次第と申聞候事。

但村井の逝去庄内人數の不殘引揚候よし。

一三日朝四藩不殘柴橋へ着。但庄内勢一人も不居故、容易ニ乗取候よし。

一昨日之請書村井ニ預ケ差上候処、宜候ハ、調印可致ト、柴橋役人共中村小四郎へ申候處夫
ハ別ニ取直リニ付よしといふ。

一吉田も重野儉次郎同道、手勢引連跡ハ罷越候処、中村小四郎申候ハ、此度之儀ニ付吉田殿へ
御頼之儀有之候ニ付、仙臺へ歸リ候節同行可致といふ。

但此趣ハ吉田取計過キ候ト申意之よし。

一吉田ハ直ニ天童へ行て宜といふ、外ハ四月一日柴橋と寒河江ニ一泊、同夜大八を呼ニ來リ
罷出候処、何とも不申翌五日ニ相成、今日出立ニ付同行可致といふ。

一七日ニハ仙臺ニ着。

右之通ニテ、外ニ仙臺庄内之怨可受儀更ニ心當無之。

一柴橋ハ自今仙臺御預ニ相成、右御預リハ十日前後位ニして、元々河野新八郡司代格ニ相成、
柴橋を支配いさ様ニ相成候処、是ハ吉田奸計トノ風説有之候へ共、一圓不預賄賂千兩を
取候杯ノ風説も承リ候へ共、少しも不預事ニ有之ト申聞候事。

一四月十日頃仙臺様御城下御發駕前ニ、仙ノ城下ハ名札を掛置候処、南部ノ江楮五郎尋來、御
國事之談ニ及、更ニ干戈を不動様いさし度ト、額を集めて談し、此上ハ小藩之諸侯ニテハ不
相分、大藩之諸侯御周旋ニ無之候而ハ、尋不明庄内ニ大八知已無之江楮有之哉ト申候へハ、
黒川何某ト申もの有之、庄内ニテハ罪を謝ス心有哉否無ニ極リ候へハ、干戈動々相極リ万
民塗炭之苦ニ陷候間、江楮參リ吳候へト申候へハ、公命を持候故不相叶といふニ付相別る。
一翌十一日ニ相成、昨日之咄難打捨、猶又江楮へ以書面申越候処、江楮儀仙臺侯御發駕ニ付不

在宅此節江楮五郎茶やよて御通りを拜見、筑前藩ニ御國事一躰之模様相尋候よし。

一十一日天童へ庄討ニ付而之本陣江仰付、大八十二日出立いさし候ニ付、旅裝之処へ江楮入
來、書面之趣御尤ニ付盡力いさし度、乍去自身難罷越候間、門人内藤惇藏を遣し可申トノ事
ニ有之よし。

一十二日惇藏同道、關山ハ長藩へ遣リ。

但庄内ハ嚴重難入候間、吉田知己長藩之根本作馬よりの使者ニいさし、莊内ニ遣候よし、
十八日頃ニ可歸処、今不歸候事。

一長藩中村小四郎柴橋討入一件ニ付、大八量過ルを惡居候処、郡司代河野新八等へ討入ハ大
八勸め也ト、薩長之内よて申聞候段、根本作馬へ新八咄候よし、右ニ付作馬大八へ油斷致ま
しきト申聞候よし。

右河野新八の咄を仙ニテ信し候へハ、仙怨庄ニテ聞ケハ庄怨の道理なりといふ。

天童一件。

一吉田大八召捕差出候迄ハ、爲人質、重役一人附屬之もの、拾人位差出候事ニ治定いさし、庄内
勢ハ不殘楯岡引揚候事。

但奥羽各國盟約ニ加リ候上ハ、以來援兵并米穀等御頼之節ハ、幾重ニも周旋可致旨、左之
もの申聞候事。

中村權太夫。

北爪 楯六。

佐藤文之進

一吉田大八へ心副番晝壹人ツ、夜貳人ツ、仙藩御國と更代朝五時夕七半時更代之方、但山形への晝夜一人ツ、但今晚の御國の四人、昨夜之預差出明日の本文之通。

〔木滑要人日記〕

一天童之姦臣吉田大八、國を誤り候罪を覺悟致し、在方寺ニ而謹慎罷在候處、右之場所を脱シ、御國御出勢先江依頼、自訴スル心得ニて出懸候處を、庄内藩士召捕、仙米兩藩夫々評議之上、詰り山形藩江預け、仙米兩藩よりも人數差出し相守候由。

同年五月、寒河江假役所、去月庄内軍天童攻撃ニ際シ、焚出セル糧米ノ支拂證ヲ小關村ニ交附ス。

〔小關村文書〕

覺

一米三俵五升五合。

小關村。

右も庄内人數通行之節、焚出いし候趣ニ付、書面之通り相拂候之事。

寒河江。

辰五月。

假役所。

此證書ハ、明治元年戊辰閏四月四日、天童城主織田兵部少輔、庄内鶴岡ノ城主酒井左衛門ノ兩將、最上川堺ニテ窪野日船場谷地道口ハ織田勢、藏増船場ハ漆山陣屋秋元勢、寺津長崎方

面口上ノ山松平山城守勢、山形水野監物勢堅メ居リ、同日未鳴ヨリ賊庄内勢合圖ノ梵鐘ヲ鳴ラシ、堅メノ同場忽チ打破レ、織田勢敗北ニ歸ス、同勢三千余人當村ヲ經テ天童ニ押寄セ、同城ヲ燒拂ヒ、其節當村上端ニ甲冑ヲ着シタル諸士、鎗長刀ヲ携ヘ雖ヲ立ル所モ無キ程ニ休憩ス、當村ヨリハ焚キ出シセシニ付、同役所ヨリ右米下附ノ證書ナリ。

同年同月八日、秋元但馬守家臣高山藤内、藏増村ノ戰況ヲ大總督府ニ具申ス。

〔太政官日誌第十九〕

館林藩届書寫

羽州村山郡に但馬守分領有之候に付、漆山村と申處へ陣屋取建置、郡奉行始夫々取扱向之役人兼て差遣置候處、先般出兵之儀に付、被仰出之旨に御座候に付、素々陣屋の事故多分之人數も無之候得共、御差圖次第有合之人數繰出の儀、但馬守より兼而申付置候儀も有之候處、今般御鎮撫使様御發向にて、御差圖之儀も御座候に付、有合の人數繰出候處、去月四日藏増川岸にて戰爭之節、大砲附の者別紙之通討死手負有之候旨、在所館林表迄申來候由にて、猶今便申來候、此段不取敢御届申上候。

秋元但馬守家來

五月八日

高山 藤内

大砲隊

一討死、但玉疵

梶塚勇之進

同

一 深手、但股打拔、

小澤鋒次郎、

一 即死、但額打拔、

大砲隊附下部、

清 六、

一 深手、但刀疵數ヶ所、

同、

鶴 吉、

一同、但鎗疵數ヶ所、

同、

孫 八、

右之通御座候以上、

同年同月二十五日、天童城主織田信敏米澤ニ抵ル、上杉齊憲父子之ヲ興讓館ニ迎饗ス。

〔木滑要人日記〕

一天童侯御國難御救被遊候爲御禮御出之由、先達而御案内有之、尤 御家様江計御出之節、御斷ニも可相成處、已ニ御發途ニ而仙臺侯江被爲入、夫々御家様江被爲入由ニ候得也、御辭退も難相成都合ニ相成候事。

一 於御城御逢可被遊候處、此節御式臺下屯所等ニ相成御差支ニ付、於學館御逢被遊候ニ付、兩上様四時之御供揃ニ而被爲入。

同年六月五日、松平信庸既ニ領内ヲ空虚ニシ、兵ヲ戰地ニ出ス、堀田氏柏倉陣屋、秋元氏漆山陣屋ノ兵、乘シテ以テ來襲センコトヲ懼レ、使ヲ米澤ニ遣シ兩陣ニ牒シ、兵ヲ戰地ニ出サシメンコトヲ請求ス、即チ之ヲ許諾シ、香坂七右衛門ヲ遣ハシ、兩陣屋ニ諭シ出兵セシ

ム、皆之ニ應ス。

〔木滑要人日記〕

一 上ノ山侯御使者來候ニ付、御使番罷出候處、御口上書を以堀田侯陣屋柏倉、秋元侯同漆山江出兵御促シ被下度旨御頼有之、右趣意ハ右兩家ノ專ラ天朝方之處、此節上ノ山者國を空虚ニシテ出兵之儀ニ候得也、虚を伺襲撃ノ恐レ有之、且奥羽合從ニ付而陣屋詰ハ奥羽之御同盟ニ違背不仕趣ハ先達而一札御取上ケモ有之候儀ニ候得也、越地至急之趣を以、出兵御促し之上も、御違背ハ不相成筋ニ付、旁御使者御差立被下度云々。

六月十日雷雨、

一 香坂七右衛門最上ハ罷歸ル、柏倉ニ而ハ無異議、少人數ホから差出候由、漆山ハ當時館林偽官軍出兵之最中ニアリ、不得止督責ニ應シ、偽官軍方江出兵罷在候得者、當陣屋ハ奥羽方江出兵ニ申事ニ而ハ即時ニ被揉潰候勢ニ而、何分心配仕候間、人數之儀ハ御藩ニ差上置候間、何レ之役事ニ被召遣候共、違背不仕候間、出兵之儀ハ御免被下度云々申聞ニ候得共、同盟之廉ニ而出兵無之候而も、不相濟云々説得ニ及候處、詰リ左様ナラハ出兵仕候ニ付、漆山の名を不出 御家様江之附屬兵之唱ニ而、御同勢ニ打混し出陣之様、被成下度云々願之候由。

同年同月十八日、天童城主織田信敏、其臣吉田大八ニ死ヲ賜フ、大八觀月庵ニ自殺ス、年三十有七、後朝廷其ノ節義ヲ褒シ、正五位ヲ追贈セララル。

〔天童史料〕

記吉田大八死節事、

吉田大八名守隆号素道軒、姓藤原氏、家世世羽前天童大夫、爲人倜儻、好文嗜武、常懷節概、有經世之略、慶應四年戊辰二月、從侯祇役京師、既而有東征之事、官賞織田氏祖先勳勞、命爲與羽督府先導使、侯尙幼、守隆代侯從督府在仙臺、時庄內兵侵掠天童、奪幕府所置寒河江柴橋寨、而據之、封內洵懼、守隆曰、幕府今既解職、寸壤尺地無非王命、而竊據之理乎、即訴之督府、督府遣薩長等兵、守隆爲先導討而却之、於是守隆導副督府自上山詣新庄、庄內乘虛又奪柴橋、據寒河江、徑攻天童、天童告急、新庄督府乃使守隆爲督、藩士川路篠崎等爲監、率諸藩屯兵往援之、守隆沿最上川東邊悉奪所在、舟斷敵來路、分屯五所禦之、乞援四隣、皆不應、山形佐倉兵守寺津口、館林兵守藏增口、土浦松前兵守野田口、守隆守窪野目口、津田修理守田井高關兩口、隔川與敵砲戰、數日勝負未決、閏四月四日、野田寺津一時潰散、敵渡川半、繞軍後半、燒本城、城遂陷矣、老侯逃于仙台、守隆在窪野目聞敵砲漸迫、馳馬欲應援、登小丘望見、館林兵奔潰、敵旗飄其後、又回首東顧、本城炎烟漲天、急回馬馳向本城、敵兵遮前不得過、疾加鞭突圍到老野森、砲丸雨散、敵兵四面簇擁而前、知不可如何、嘆曰、勝敗兵家之常、然身爲軍督、不能却敵、國破城陷、何顏見我君與督府乎、揮刀馳入敵中、安東功者深通鎗法、頗有膽量、守隆常客待之、亦從此役扣馬諫曰、今日之敗、非由我也、君何死之爲、不若索老侯所在、且與督府議再舉、守隆感悟、突圍一方而去、安東功奮戰奪敵旗、向東徐去、敵不能尾、此役槍惶從守隆者不過四五人耳、守隆潛匿樵家、使功索老侯知、既赴仙臺、即夜欲到新庄乞援、機出樵家、敵兵塞路不得通、便入山中、寓燒炭者家、密使功伴爲賤役、冒敵中到新庄、官軍呵其異樣、功即傳守隆之言、且曰、孤城無援、既爲敵所陷、乞急出兵救之、官軍聞知、守隆困厄、出五十金、付功還、邀守隆、守隆出潛處、欲赴新庄、到土生田、與援兵相遇、乃先導、襲橫山

燒長、諱直到天童、得復本城、追擊敵軍、連戰勝之、敵軍遁歸、於是諸藩兵罷、各歸本營、無幾、與羽諸藩背初議、密相約、欲襲新庄、副督府之營、守隆執義不肯、時老侯在於仙台、諸藩深疾守隆、不與謀也、迫脅老侯使殺守隆、老侯不得已、讎守隆、守隆伏匿村里、庄內兵又大舉挾擊、將屠天童、孤城不能當、衆議以爲今應陽與諸藩連和、俟官軍大舉之日、唱義破敵、以表素志可也、於是遣使通意於諸藩、諸藩不信曰、若然、則當殺守隆、出其尸以證之、我亦解圍而歸矣、侯悼惜不得已、命兵士捕之、國民懷守隆、惠政私就、潛處曰、危如累卵、蓋暫投督府營而避之、守隆慨然嘆曰、吾聞敵獲我、首則社稷無害、吾請出而就俘、往到沖原、爲敵所縛、到米澤、會議所、向堀尾某唱大義、說順逆、確乎不屈、敵亦感其精誠、解縛拘于市家、六月十八日、徙囚諸天童、觀月庵、終使山形士某促死、守隆臨死、乞筆紙書絕命辭曰、衆口鑠金、豈信哉、郭爲焦土、屋爲灰、男兒宜識義不義、腰下寶刀帶冷來、有二子皆幼、遺誠曰、逢時之不祥、身死而不替義、汝等成長之後、當識乃文之心、又曰、後事宜隨叔父之教、戒書畢、投筆從容、割腹而死、年三十有七、村里聞之、有號哭廢業、斷食者、其平生得民心、亦可想也、太政官以聞、賜黃金二百餅、以資祭奠云、

野史氏曰、東陬之國、沿於弱政、殆三百年、

王師一旦東下、事出匆卒、上下疑惑、不知所適、從獨天童以祖先勳伐、奉先導之命、守隆東奔西馳、頻唱大義、不爲諸藩所信、孤忠痛憤、臨死不屈、比之張睢陽、顏平原、有過而無不及也、噫、

〔善行美蹟〕

明治元年二月、朝廷熾仁親王を征東大總督となし、旌旗堂々、江戸に向はせられしかば、徳川慶喜直に恭順の實を表し、江戸城を奉納して水戸に退きたるも、奥羽二十餘藩は猶同盟し

て以て錦旗の御前を遮りたり、既に錦旗を遮りたる上は、賊たるの名に於て明にして、一言辨疏すへき餘地あるなし、然れども、其の心中を分析し、仔細に検討し來れば、彼等が賊名を負ふに於て寧ろ甚だ憐むべきものあり、彼等心に以爲へらく、文久慶應の際幕府薩長二藩と確執を生じ、尋いて大政を奉還せしより命令主として二藩の方寸より出づ、會津藩主が積年京都守護の重任を負ひ、關下を鎮めたりし功績を没却して、俄然歸國を命せしこと、徳川慶喜が新政に參する權を奪ひ、寧ろこれを陥れて失態あらしめんと謀りしことの如き、全く彼の二藩が天朝の聰明を蔽ひ奉りて、私心を逞うせんとするものなりと、因りて潛に君側を清めんことを念へるものゝ如し。

鎮撫總督九條道孝の奥羽に入るに當り、會津藩主松平容保、仙臺米澤二藩に依りて罪を謝するや、奥羽各藩連署して書を總督府に奉り、其の罪を免せんことを請ひたれども、參謀世良修藏等に異議ありて、其の書遂に却けられぬ、是に於て彼等はいよゝゝ其の信を堅うせり、是一視同仁の朝旨にあらす、全く一二藩の私情に出づるものなり、朝威を負ひて私情を擅にするもの、討ちてこれを懲らさん、是皇室の藩屏たる吾人の任なりと、因りて世良修藏を斬殺し、九條道孝を仙臺に幽し、仙米二藩盟主となり、東北二十餘藩の宿老を會して曰はく、朝廷に奏して官軍の引上を請ひ、若し聽かれずんば兵を發して君側を掃蕩すべしと、而も官軍引上の申請固より採納せらるべくもあらず、即ち意を抗戰に決し、先づ兵を出して會津を援け、進みて白河を陥れたり、是に至りて反形具に備はりぬ、然れども其の向背を愆りし所以、元薩幕の反目疾視に起り、天下の局面紛糾錯亂して其の條理を尋ぬるに迷ひ

たるの致す所にして、敢て錦旗に及向ひ奉らん意志にあらざるなり、奥羽たとひ東陸に僻するも、均しく神州臣民として正大の氣を呼吸し、無窮の皇恩に浴したるものゝ子孫なり、豈かりそめにも天威を冒瀆し奉るの邪念あらんや。

然りと雖、たとひ如何なる事情の存するにもせよ、一度朝命を拒みたる以上は、亂臣賊子たること固より論なく、其の罪誅に容れざるなり、奥羽の大勢斯くの如きに際し、獨り新庄天童の二藩は七萬石と二萬石との小封を以て、遂に羽後の秋田藩と共に斷然同盟の外に孤立し、賊焰猖獗の間に屹然として、能く大節を守りぬ、是固より藩主戸澤正實、織田信學の精忠に係る所なりといへども、抑々又其の家臣に大義名分を明にするものありて、士民を督し藩論を定め、致死輔弼の任を全うしたるに因らずんばあらず、其の人を誰とかする、新莊藩に於ては川部伊織、竹村直記、吉高織部を算すべく、天童藩に於ては吉田守隆を推すべし、而して守隆の事績、最も壯烈、事長くも叡聞に達し、明治二十四年十一月十七日正五位を追贈せらる、而して元山形縣知事柴原和の撰みたる碑文具に守隆奉公の狀を盡せり、因りて之を此に掲ぐ。

明治戊辰、東北擾亂、日尋干戈、而守義殉難、如舊天童藩士吉田君、尤爲壯烈、君諱守隆、字有言、稱大八、吉田氏世仕、初前天童藩、其先諱守綱、仕右府織田信長及内府信雄、關原之役、從信雄、子信良、在岐阜、及城陷、守綱奉信良、走依肥後加藤氏、元和初、徳川氏封信雄於大和上野、守綱乃奉信良歸、信雄、信雄大悅、擢爲老臣、食祿一千石、君其十世之孫也、父諱守寬、母山下氏、君爲人、儻有大志、講學嗜武、技最潛心、於紹略、文久三年、藩主織田信學、知其才可用、委以軍務、兼

藩參政爲養正館督學。君以身率先。士風大振。無幾轉用人。又爲中老。明治元年二月。信學疾病。使世子信敏朝京師。君扈從焉。時東奧叛亂梗化。王師將發命。信敏爲總督先導。信敏年少使君代之。君從總督九條公在仙臺。莊內兵乘間掠寒河江。總督遣薩長二藩兵討之。使君爲先導。敵望風退去。後又導副總督澤宜種至新莊。敵復取寒河江。天童告急。副總督使君率諸藩兵討之。君設寺津窪野目田井高關藏增五營夾最上河拒戰。已而寺津軍潰。敵進陷天童。信學遁于仙臺。君守窪野目。砲聲在後。馳馬探偵。敵兵逼迫。君率兵返戰。敵又別發兵渡河來襲。君且戰且退。至老野森。敵兵遮擊。彈丸雨注。君歎曰。身爲軍帥。不能勦賊。國破城陷。何顏見我君。君將自殺。有安東功者。控馬諫曰。勝敗兵家之常。君何死爲。君而死誰能爲。後圖不若。投督府謀再舉也。君乃衝圍出。匿樵家。遣功於新莊請援。副總督聞之。使功招君。途遇援兵至。相與襲橫山。燒長藩復天童。是時信學從九條公於仙臺。仙臺兵變志援賊。要信學斬君於其藩。於是藩論噉々。君退居漆山。長藩桂太郎勸君趨新莊。君不聽曰。社稷已亡。寡君出在仙臺。今我避難苟免。人謂之何。吾唯有一死耳。太郎知其志不可奪。終夜痛飲。揮淚去。莊內兵患我不同盟。將來擊。衆相議曰。衆寡不敵。陽和以待官軍。乃通款於敵。敵不信曰。果然出。大八首爲證。或謂君曰。時勢如此。蓋投督府避禍。君慨然嘆曰。我首可以拯國難。何惜一死。乃出就縛於米澤兵營。見堀尾重興。論大義順逆。抗然不屈。重興感動爲解。其縛六月十八日。幽君於天童觀月菴。君從容索筆書絕命詞。遺書二子曰。予逢時不祥。投身就義。汝等成長後。當識父志。書畢屠腹死。時年三十七。聞者無不悲泣。及亂平。朝廷褒其節義。三賜祭。十有四年。車駕東巡。召其孤於山形行在所。賜謁。勅使臨祭。又賜祭祀。蓋特典云。嗚呼。向者使君出投督府。不唯免禍。當取富貴而不爲身計。一死殉難。何其

忠也。予爲山形縣知事。君弟左文來請予文表之。乃詮次行實係以銘曰。

維祖蹇蹇 能奉孺子 崎嶇兵間 宗社有祀
 維孫矯矯 乃心王室 舍生取義 甘就囚桎
 嗚呼祖孫 氣類感通 生死雖異 其義則同
 予也不敏 職在敦風 勒辭貞珉 責彼嚴封
 明治二十二年九月

山形縣知事正四位勳三等柴原和撰

〔吉田家文書〕

御先たち申あけ候事。不孝の罪御免し被下度候。申上候ももつたいなく候得共。御年召し候ていものおしみ致候。世人のならひに候間。出入之者などにうとまれ不申様御心付被下度候。

又其内縫殿へゑん組致候者。當人氣ニ入り候者。何とぞ不びん御加へ被下度候。縫殿へあひ不申事残り惜しく候。死期取急き候まゝ。あらく筆とめ申上候かしこ。

六月十七日、
 御母上様、

參る。

一筆申殘し參らせ候。日もし事御家の爲め無據御はて候。御母上様の御なけき御察申上候。そもじ萬々年も御無事にて。子供等によく御教へ御そたて可被下候。何事も申さぬ。

申すにますと御察可被下候、おせいへも宜しく、縫殿ニも宜しく、御便りの折立林おん姉様へも宜敷御申可被下候、かしく。

六月十七日、大 八。

おせきどの、

参る。

逢時之不祥、身死而不替義、唯嘆願之一書留身後、生長之後可知、父之志、時有限脱筆。

戊辰六月十七日、吉田大八。

吉田雄夫殿。

吉田逸瀬殿。

再白宜隨叔父之教戒候。

同年同月二十八日、松平信庸使者ヲ米澤ニ遣ハシ、秋田藩ノ叛狀ヲ報シ、出兵ヲ請求ス。

〔御年譜〕

一上ノ山より御使者罷出候に付、香坂七右衛門を差出候處、追々北方之事情探索ニ及居候處、秋田之一藩とんと勤王一圖と申事ニ相成、三卿九條澤井並ニ五藩、薩長小倉之人數を一同ニ引入、永住爲致候由ニ而、此節立派ニ旅館築造等ニ相成、最早判形眼前ニ付、是非ニ用心無之而ハ不相成候ニ付、弊藩之殘兵ニ小隊有之分、拂而出兵仕候ニ付、何卒御繰合御出兵被下度、御頼之趣也、右ニ付五十騎隊之内、佐藤孫兵衛を大將ニして、物頭相添三小隊被遣候方決評、同年七月七日、仙米兩藩將最上郡金山町ニ會シ、秋田口防禦ノ策ヲ講ス、是ヨリ前、戸澤正

實効ニ秋田ニ通款ス、其將領依々其策ヲ阻ス、而テ兩藩將未タ之ヲ察知セサルナリ。

〔萬覺留〕

七月七日、

一上ノ山人數百六十人余、山形人數二小隊、岩手山人數百人余、又々繰込相成困難之場合也。
一今朝六ツ半時過、山崎頼母同道騎馬ニ而、金山町梁川播磨陣所へ罷越、大談判最中、米澤立岩泰藏申聞ハ今朝より雄勝峠へ見張拵候趣、右ニ付種々談判筆紙ニ難盡、漸左之通一決。
仙臺より一小隊、米澤より一小隊。
此方様より一小隊。

右之通峠へ爲差登、秋田之趣意柄承り候積ニ而、今八ツ時過繰出候處、嚴重ニして登る能ハ見合ニ成候、大談判相濟暮頃乗切ニ而罷歸、誠ニ難儀成る場合、此末如何と被案思、峠先之一件ニ付、及位詰之内より皆川勘次金山町へ罷越、首勝藏ハ間屋を經而新庄へ罷越、一大事なる事なり。

同年同月十一日、戸澤正實盟ニ背キ、秋田藩ト協議シ、仙臺米澤以下同盟諸軍ヲ掩襲ス、諸軍潰敗ス、仙臺ノ將築川播磨之ニ死ス、是ノ日酒井忠篤使ヲ遣ハシ、松平甚三郎酒井吉之丞等ニ命シ、秋田口ニ轉陣セシム。

〔戊辰庄内戰爭錄〕

七月十一日、此曉山岸嘉右衛門早追ニテ鶴城ヨリ來り、秋田新庄彌破盟ノ色顯ハル、是ヨリ

直チニ引返シ、一番隊ハ院内ヨリシ、二番隊ハ矢島ヨリ討入ルヘシト也、依テ諸隊會シテ正午十二時頃同所ヲ發シ、山形ニ着テ宿陣ス。

〔萬覺留〕

七月十一日、

一昨日より仙米山形天童上ノ山之人數及位并中田有屋鏡澤へ繰込、手配相成居候處、峠先より薩長小倉肥四藩之人數押來り、及位出張之此方様(戸澤家)御人數と談合之上、仙米山形上ノ山天童之人數へ討入候處、賊兵忽チ大敗軍ニ而引退、死人夥敷味方ニハ死傷無之、右之趣及位村より注進有之、晝九ツ時早鐘打鳴し候ニ付、早速御城江相詰、御城其他口々ハ嚴重ニ相堅め、晝夜巡邏有之。

但放火ニ而今日及位村不殘燒失。

一此方様ニハ彌官軍方ニ御決定ニ相成。

一中村善作方秋田表より飯着。

一薩長肥小倉之勢ハ、今晚金山町宿陣、此方様御人數ハ御城へ繰上。

一仙台藩築川播磨五十嵐泰助始頭分多討死士卒數不知。

但賊兵退候道ハ、萩野村より小泉村村山屋瀬見邊、山越ニ而遁去り候由。

一右戰爭ニ付越後口江繰込之庄内勢、楯岡邊より名木澤へ引返し、明日ハ新庄江押來候注進有之ニ付、庄内勢へ以使者種々談判首尾能相整、先舟形より此方へハ繰込無之由。

〔木滑要人日記〕

一夜五時前平賀久米次新庄領金山ハ立歸り、我等宅江立寄佐竹彌背反之處、新庄も同斷ニ而右新賊之手引ニ而、秋賊之兵ヲ問道々々繰入、御當様御人數佐藤孫兵衛隊、山田勇七隊、堀内庄右衛門隊、大關武四郎隊、仙藩一大隊と共ニ蟻谷峠を取敷居候、南之方中田江相廻り、其外三方之間道ハ相迫、左右前後の援路を相斷し、如何成行候哉不相知、脇間道被相備候、小川源左衛門隊ハ敵ニ被追立、是ハ新庄ニ相掛り名木澤ニ出候處、庄内山形ハ引返し之勢ニ出逢候ニ付、則力を合於舟方一戦庄兵勝利、此處ニ而一先ッ喰留置候得共、賊ハ多勢繼來候、且鋒も強く油斷不相成儀ニ付、精兵十分御繰入之様申來。

同年同月十三日、庄内藩將酒井吉之丞舟形ニ陣シ、將ニ新庄ヲ攻撃セントス、會々敵軍來リ迫ル、撃テ之ヲ破ル。

〔酒井世紀〕

翌十二日二番大隊、楯岡より引返して船形ニ宿し、一番大隊ノ至るを待て戰略をせんとい、同十三日黎明官軍船形に押來り、鯨波を揚て發砲す、味方川を前にして相戦ふ、小隊長高橋金藏頭組酒井治郎右衛門頭淺瀬を涉りて敵の後より攻立てけれハ、敵兵不意ニ驚き右往左往ニ敗走す。

〔萬覺留〕

七月十二日、

一昨夜長州肥州より金山町迄、一人罷越吳候様申來候趣ニ而、山崎頼母小子(余語助)金山行被仰付、今晚七ツ半時頃出立、同所江罷越候處、死人如山有之直ニ長州本陣に參り、中尾榮吉

郎へ種々取合、晝八ツ時過御城へ歸着、委曲御席へ申上る。

一 今曉金山町宿陣之官軍より、相談致度儀有之候間、軍事掛之者差出吳候様申來候ニ付、山崎頼母と小子兩人罷出候様、戸澤要人方被仰閉候條、即刻同所へ罷越候處、長藩中尾榮吉郎申聞ニハ、是より直ニ賊徒追拂として、御城下迄繰出候積ニ付、兵糧用意之儀御頼有之候間、承知之旨及挨拶晝後罷歸。

一同刻官軍御城下へ繰入、今晚當町一泊。

七月十三日、

一 舟形之賊兵彌討拂之決定ニ相成。

此方様御人數一ト先ニツ屋迄押行、追々舟形邊迄繰出候處、賊方より發砲ニ付、此方より應砲致し、右之趣官軍へ案内候處、肥州先陣ニ而押來無程戰爭、其節小子物見被仰付、兩三度舟形邊迄罷越、長州之斥候見違ニ而、戰之模様不案心ニ相成、其日の晩景ニ付、双方相引ニ成、敵大勢味方小勢ニ付、明日計被案思、必死之外無之存候也。

一同夜八ツ時過薩州藩、目明與右衛門迄參り、吳候様申來候ニ付、可罷越旨中村善作方被仰聞候間、直ニ罷越候處、薩藩多人ニ而申聞候ハ、今晚中舟形村賊徒燒討不致候而、明日之戰甚以難儀ニ付、火付之者相撰ミ、即刻差遣吳候様頼有之、然るに最早夜明ニ近く、少々手後れ候も難計候へ共、可成丈ヶ早々相撰ミ、差遣可申旨及挨拶、密ニ與右衛門子分之者より、相撰差遣候様申談候へ共、差掛何分六ヶ敷申出候ニ付、御城中へ飯善作方へ申上、高橋勘助呼出、右一條ハ、一大事之儀ニ付、必死ニ成リ、勤候様談示候處、乍不及身之續丈ヶ相勤勤候旨申出。

直ニ身をやつし舟形村江忍入候へ共、其内方々破れニ相成、空敷飯候段申出。

同年同月十四日、庄内藩將酒井吉之丞新庄城ヲ攻陥ス、戸澤正實舉族秋田領院内ニ遁去ス、
〔同上〕

七月十四日、

一 今朝薩州隊長和田五左衛門所へ罷越、此後之謀計之次第委細談判ニ及。

一 今朝より薩長肥小倉、并此方様御人數四五小隊繰出、舟形表ニ而大戰爭、兎角小勢ニ而難戰ニ付、一ト先城下迄引揚、然ルニ近々敵方より押寄來り、仁間村角澤村飛田村等ニ而戰爭ニ成り、如何之故り官軍不殘、金山町の方へ引揚候模様ニ、依而種々談候へ共、不聞入、暫く城外ニおゐて防戦ニ及候へ共、兎角一手ニ而防禦難叶、其際薩長肥小倉四藩之隊長より、只今金山町の方へ、御引揚被遊候様申上候ニ付、無止其意ニ被任、御引揚被遊、御城へハ松井紀右衛門殿差火致し、誠ニ無此上殘念之次第也。

一 兩御奥様ニハ、晝九ツ時前ニ御立退ニ而、夜通ニ院内迄御越被遊。

一 殿様ニハ八ツ時過御立退、夜通ニ院内迄被遊御越、誠ニハ奉忍入候。

一 今朝薩州藩隊長和田五左衛門宿所へ罷越、此後之見込并謀計等、内々談參候様御席ニ而被仰閉候ニ付、即刻南本陣へ罷越、同人へ面會被仰付候趣、逐一相談候處、此上ハ只々百人ハ一騎ニ相成候共、御當城を枕ニ討死と覺悟取極候外ニ、手段も無之旨申聞、然ルニ當初參候と、直く後ニ隠したる手紙之端を、對談ありら潜ニ窺見候ニ、數度之苦戰、城池不堅固、加勢云々トノ文面見受たるを以、只同人挨拶之趣ハ偽りと心付、扱被仰閉候趣ハ誠ニ難有御心底

飯り主人へ申聞候へり、定而大慶可致我々共ニ至る迄、存生居候心得之者として、一人も無
 之と雖も、秋田表ニハ御三卿様御滯陣、此砌ニ御守衛ハ秋田勢計ニ而、御不安心ニ無之候哉、
 當地ニ而各藩不殘討死候而、御三卿様御満足ニ可被思召候哉、彌當城を枕ニ御一同御討死
 之御覺悟ニ候ハ、主人計御三卿様と御一處ニ進退爲致度、尤此場ニ而討死候而勤王ニ相
 成候哉、一度ハ存命勤王ニ可相成候哉、種々押而談候へ共、討死之外無之旨返す、申聞ル、
 就而ハ我々如キニ本心を明し申聞敷と存罷歸り、前條之趣委細御席江申上。
 一同日午之刻追々諸口苦戦ニ相成候ニ付、殿様御城外へ御出馬之上、親敷御指揮被遊候へ
 共、賊軍四方ニ廻り孤城ニ迫り、味方小勢殊ニ一同疲勞ニ及候處、其内官軍一同金山町ノ方
 へ引揚候ニ付、如何之趣意ニ候哉相尋候へ共、何等之挨拶も無く引揚程無ク各藩隊長より
 殿様ニも、早々金山町方ニ御引揚被遊候様申上ルニ付、一と先隊長衆ト御相談被遊度思召
 ニ而、泉田村先迄被爲入候處、各藩隊長中御待受致居。

〔戊辰戰爭日記〕

七月十四日、

- 一 九ツ時過御出馬、(戸澤)泉田ニ而一寸御小休、夫ヨリ金山驛江被爲入、同所縁正寺江御小休、六
- 一 御草子壹箱ツ、時通也夫ヨリ夜通シ被爲入、
- 一 岸三郎兵衛、
- 一 岸 甚藏、
- 一 右之通差止之。

七月十五日、

- 一 朝六ツ時過、秋田御領分院内江御小休。
- 一 當所地頭大崎若狹より、以使者酒登斗差上之、御用人披露之。
- 一 大山左源治爲御伺參上御達有之。
- 一 右御到來之酒肴、御供一統江被成下之。
- 一 四ツ時頃同所御立湯澤江七ツ時過御着。
- 一 桃齡院様奥様、於鉛様、錄太郎様ニハ院内へ御止宿。

〔酒井世紀〕

翌十四日、一二の大隊新庄に向ふ、一番大隊鳥越の戦ひ利無くして船形ニ退く、二番大隊苦
 戦して敵の陣を打破り、遂ニ進て城を抜く。

〔木滑要人日記〕

七月十六日雨且晴、

- 一 八時前上泉彌門新庄へ早ニ而到着、新莊江庄内之上山を引返之勢、十二日到着、十三日一戰
 ニ及勝利有之、十四日ニも猶又相戦、三方ハ手分ケニ而焼打いたし、清水口ハ打入、清水口ハ
- 一 城内ニ入、城江も無滯火を掛本城、并家中共ニ不殘燒拂候を見而、十五日朝出立相歸候云々
 注進也、愉快々々。

同年同月十七日、庄内軍將酒井吉之丞、令ヲ新庄領各村ニ布告ス。

11
306

編續
東村山郡史

卷之一終

〔布告拔書〕

一法令之儀者是迄之通相心得可申事乍去庶民之難儀ニ相成候儀者追々取捨可致もの也。
一庄内之者共威光ニほこり威勝ケ間敷儀ハ勿論不依何事庶民之難儀ニ不相成様申渡置候
得共萬一心得違之者有之候節ト聊無遠慮訴出可申事。

辰七月

奉行

終

